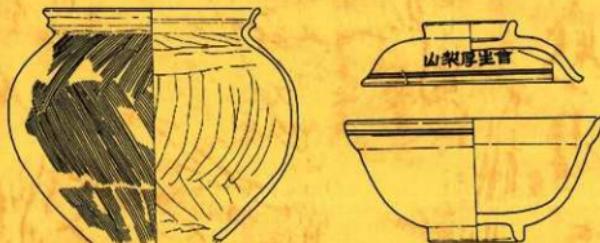


延命寺遺跡

—山梨厚生病院授産施設建設に伴う発掘調査報告書—



2005年3月

(財)山梨厚生会 山梨厚生病院
山梨市教育委員会
(財)山梨文化財研究所

延命寺遺跡

—山梨厚生病院授産施設建設に伴う発掘調査報告書—

2005年3月

(財)山梨厚生病院
山梨市教育委員会
(財)山梨文化財研究所

例 言

- 1 本書は山梨県山梨市落合860番地に所在する（財）山梨厚生会山梨厚生病院敷地内の授産施設建設に伴う発掘調査報告書である。
- 2 本調査は山梨市教育委員会の指導のもと、（財）山梨文化財研究所が実施した。
- 3 本書の原稿執筆・編集は横原功一（山梨文化財研究所 考古第2研究室）が行った。
- 4 発掘調査における基準点設置、グリッド杭打設、全景写真撮影、等高線図化業務は（株）シン技術コンサルに委託した。
- 5 1号井戸山刀子については、（財）山梨文化財研究所保存科学研究所に依頼してX線写真撮影を行った。
- 6 本書に関わる出土品、記録類は山梨市教育委員会で保管している。
- 7 発掘調査から報告書作成に至るまで、以下の諸氏、諸機関からご教示、ご配慮を賜った。記して感謝申し上げたい（順不同、敬称略）。
（財）山梨厚生会山梨厚生病院、小林昌彦（厚生病院企画管理部長）、三澤達也（山梨市教育委員会）、奥山宗石、シン技術コンサル、十屋健作、塙谷風季、草間正彦（帝京大学）、萩原忠

とを示す。

- 5 土層説明における上色表示は農林水産省水産技術会議事務局監修「新版 標準土色帖」（1991年度版）を使用した。
- 6 遺物図版番号は遺物観察表番号と一致する。
- 7 本書図1上は国土地理院発行の1/200,000地勢図「甲府」、下は1/25,000地形図「塙山」を使用した。
- 8 本文の註・参考文献については各節（章）ごと文末にまとめた。

本 文 目 次

例言

凡例

本文目次

挿図目次

插写真目次

表目次

図版目次

写真図版目次

第1章 経過	1
第1節 調査の経過	1
第2節 発掘作業の経過	1
第3節 整理等作業の経緯	3
第2章 遺跡の位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 調査の方法と成果	4
第1節 調査の方法	4
第2節 層序	5
第3節 遺構	5
第4節 遺物	8
第4章 総括	11

報告書抄録

奥付

挿図目次

図1 延命寺遺跡の位置（上-1/200,000、下-1/25,000）	2
図2 厚生病院内建物配置と調査地区	3
図3 調査地区と土標	5
図4 ピット断面	7
図5 パレス壇（第17図4）の出土状況	12
図6 山梨県内出土の「宫廷式玉類」	11

凡 例

- 1 遺跡全体図におけるX・Y数値は、平面直角座標第8系（原点：北緯36度00分00秒）、東経（138度30分00秒）に基づく座標数値である（世界測地系数値）。各遺構平面図中の北を示す方位はすべて座標北である。
- 2 遺構および遺物の縮尺は次のとおりである。

堅穴	1 : 60
竪・土坑・ピット	1 : 30
全体図	1 : 160
土器・石器	1 : 3
土製品	1 : 2

- 3 遺構図中の遺物間実線は、遺物の接合関係を示す。破線は同一個体であることを示す。図化資料のみドットで出土地点を示し、遺物図版番号と同一番号を付け、出土位置を平面、断面で示している。
- 4 土器断面図中の破線は接合帯を示す。スクリーントーンによる網掛け部は、器皿が赤彩されているこ

図7 「宮廷式E類」分布図	12
図8 遺構の変遷	13

第19図 遺構外遺物 (3)

挿写真目次

写真1 授産施設「ひらしな」	4
----------------	---

表 目 次

表1 土器・陶磁器観察表	15
表2 石器観察表	17
表3 土製品観察表	17
表4 金属製品観察表	17

図版目次

第1図 延命寺遺跡 調査区全体図	
第2図 1~3号竪穴	
第3図 4~5号竪穴	
第4図 6~7号竪穴	
第5図 7~8号竪穴	
第6図 1~3号溝	
第7図 4~12号溝、土層断面図	
第8図 1~7号土坑、1~7号ビット	
第9図 8~26号ビット	
第10図 27~47号ビット	
第11図 48~58号竪穴、1号井戸、	
第12図 1号石組	
第13図 1~3号竪穴遺物	
第14図 4~6号竪穴遺物	
第15図 7~8号竪穴遺物、3~4号土坑遺物、3~5~12~24~25~51号ビット遺物	
第16図 1~6~10号溝遺物	
第17図 1号井戸遺物、1号石組遺物、遺構外遺物(1)	
第18図 遺構外遺物(2)	

写真図版目次

図版1 1~2:調査区南側全景	
図版2 1~2:調査区北側全景	
図版3 1:調査区南側上層 2:調査区南側下層 3:1号竪穴遺物出土状況 4:1号竪穴竪	
図版4 1~2:2号竪穴遺物出土状況 3:同土器部壊出土状況 4:3号竪穴遺物出土状況 5:同土製品出土状況 6:4号竪穴遺物出土状況 7:同完掘状況 8:同床下完掘状況 9:同塗抹状況	
図版5 1~3:4号竪穴竪完掘状況 4:5号竪穴周辺石組 5:5号竪穴 6:6号竪穴遺物出土状況 7~8:同遺物出土状況 9:6~7号竪穴完掘状況	
図版6 1~2:7号竪穴遺物出土状況 3:8号竪穴完掘状況 4:1号井戸周辺完掘状況 5:1号井戸 6:1号石組	
図版7 1:1号溝 2~4:5号溝 3~4:3号溝 5:5~6:10号溝 6:7号溝 7:8号溝	
図版8 1:9号溝 2~3:ビット群 4:1号土坑(1号竪穴内) 5:2号土坑 6:3号土坑 7:6号土坑 8:7号土坑	
図版9 1~3号竪穴出土遺物	
図版10 4~6~7号竪穴出土遺物	
図版11 7~8号竪穴出土遺物、51号ビット出土遺物、 6号溝出土遺物	
図版12 遺構外出土遺物、1号石組出土遺物	

第1章 経過

第1節 調査の経過

延命寺遺跡は山梨市落合、山梨厚生病院付近を中心とし、分布する古墳時代から平安時代の集落遺跡である。
(財) 山梨厚生会 山梨厚生病院では敷地内に授産施設(精神障害者授産施設ひらしな)を建設計画したところ、理蔵文化財保蔵地であることがわかり、2002年12月18日、文化財保護法第57条の2第1項による届出が行われた。2002年12月25日、山梨県教育委員会より試掘調査実施に関する通知を受けた山梨市教育委員会では、2003年1月22日～1月30日に試掘調査を実施した。試掘調査では、建物建設予定地内に幅1.2m、長さ30mと37mの2本のトレンチを設定し調査したところ、以前に外來病棟建物があった場所のため、多数の擾乱坑が存在するものの、古墳時代から平安時代の土師器が出土することが確認された。1月30日には県教育委員会立ち会いの下、本調査についての協議が行われ、建物建設部分について本調査が必要と判断された。

2003年4月中旬、山梨市教育委員会および(財)山梨厚生会 山梨厚生病院より(財)山梨文化財研究所に対し、発掘調査(本調査)の依頼があった。協議した結果、年内に工事着工の予定とのことから、直ちに委託契約を締結、山梨市教育委員会の指導のもと、発掘調査が行われるはこびとなつた。

第2節 発掘作業の経過

調査地点は山梨厚生病院西門寄りの車庫と倉庫、グラウンドにはさまれた長方形の敷地で、そのうち建物予定地約550m²が本調査範囲である。

本調査は2003年6月3日～8月7日に実施された。調査体制は以下の通りである。

調査主体 (財)山梨文化財研究所

調査担当者 榎原功一(山梨文化財研究所 考古第2研究室)

発掘調査参加者 奥山宗石、広瀬寛、飯沼こずえ、長谷川規愛、武井美里、直井光江、広瀬侯子、初鹿野博之、萩原明美、井部利春、深澤さつき、秋山恵美、芦澤はづ子、萩原明美、林ワルチ、深沢芳邦、若目田智子

調査の経緯は次のとおりである。

2003年6月3日(火)

重機による表土剥ぎを開始。調査区内の表土剥ぎは

土量の関係上、一度に行うことはできないと判断されたため、南北、北半に分けて、南半から調査を行い、南半の調査が終了した後に廃土を反転して北半の調査を行うこととした。レンタル器材の搬入を行い、荷物を運搬。一部鋤籠がけをしたところ、建物撤去時の廃棄坑などが多数確認された。病院通路に面しているため、フェンスを設置した。

2003年6月4日(水)

業者による基準点観測。重機による表土剥ぎは本日で終了。廃棄坑の掘削。

2003年6月5日(木)

鋤籠がけによる遺構確認。調査区の横面精査。廃棄坑の掘削で昭和26年以降の病院関係の食器、薬瓶、体温計など出土。

2003年6月6日(金)

業者によるグリッド杭打設。光波測量器による図化作業を開始。

2003年6月17日(火)

遺構確認後、竪穴、溝の調査開始。

2003年6月19日(木)

1号竪穴完掘。2号竪穴掘り下げ。搅乱坑部分で基本層序の確認、図化作業。

2003年6月20日(金)

2号竪穴掘り下げ。東壁から坏が並んで出土し、ひとつには刻文がある。3号竪穴掘り下げ開始。

2003年6月23日(月)

4号竪穴掘り下げ。3号竪穴床面から不明土製品出土。

2003年6月25日(水)

溝調査。4号竪穴の電調査。

2003年7月8日(火)

南半分の調査はほぼ終了。

2003年7月9日(水)

全体写真を撮るために清掃を行い、病院3号館屋上より撮影。北半に重機を入れ、表土剥ぎ開始。

2003年7月10日(木)

重機による表土剥ぎ。調査区壁面の精査。遺構確認を行う。

2003年7月11日(金)

北半の重機は本日で終了。廃棄坑の掘り下げ。

2003年7月14日(月)

雨のため北側敷地外側の側溝の水が調査区内に流入し、ポンプによる排水作業を行う。

2003年7月24日(木)

6・7号竪穴の調査。

2003年7月26日(土)



図1 延命寺遺跡の位置 (上 - 1/200,000, 下 - 1/25,000)



(1: 延命寺道路 2: 足原田電路 3: 中沢道路 4: 武家道路)

1号石組の調査。病院関係の食器類が多数出土。

2003年7月29日(火)

7・8号竪穴調査。1号石組の清掃、写真撮影。

2003年7月31日(木)

全景写真撮影に向けて清掃し、3号館屋上から俯瞰写真撮影。

2003年8月1日(金)

本日にて園化作業を残し、ほぼ掘削作業は終了。

2003年8月7日(木)

器材撤収し、現場作業は終了する。

2003年8月9日(土)

重機による埋め戻し。

第3節 整理等作業の経緯

整理作業は2003年9月から2005年3月末まで、(財)山梨文化財研究所内で行われた。整理体制は次のとおりである。

整理担当者 樋原

整理作業参加者 矢房静江、保坂真澄、広瀬悦子、林紀子、梶原薫

整理作業の流れは通常どおりで、遺物洗浄、注記、接合ののち、遺物実測、トレス、図版作成を実施した。井戸出土の鋏刃についてはX線写真撮影を行い、実測のため簡易的な結落しを実施したが、保存処理は施していない。そのほか理化学的分析等は実施していない。

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

延命寺遺跡は甲府盆地北縁部、笛吹川右岸の平地に立地し、標高310mである。甲府方面と埼玉県秩父方面をつなぐ秩父往還とも呼ばれる国道140号線(雁坂みち)沿いにあり、現在、山梨厚生病院付近を中心に径300mの範囲が遺跡指定されている。北西には大藏經寺山(715.6m)、兜山(913.0m)をはじめとする比較的低い山々が連なる。兜山とその北側にある棚山の山麓からは夕狩沢など平等川の支流が流れ出しているが、山梨厚生病院北側に隣接する夕川(木綿川)という小河川も支流のひとつである。平等川は山すそを西南

方向に流下し、甲府市内で笛吹川につながっており、延命寺遺跡周辺は笛吹川氾濫原および平等川等の扇状地が形成した平坦地といえる。

北西の山腹には矢坪、山根、上岩下等の集落があり、モモ・ブドウを中心とした果樹地帯となっている。遺跡からは北側に上万力金桜神社の松林を間近に望むことができる。

今回調査が行われた地点は山梨厚生病院敷地内で、6号館とその西側に隣接するグラウンドの西隣、病院の西門近くにある車庫北側にあたる。

第2節 歴史的環境

延命寺遺跡の北500mには上万力金桜神社が所在する。遺跡名とされた字名「延命寺」は、遺跡付近にかつて存在した寺院名で、「甲斐國志」「大宮椎現」(巻56 神社部第2)中に記載がみられる。ここでは「甲斐國志」を書き下した赤岡重樹著「甲斐國古社史考」の一文を引用しておく。

「金桜大神社 東山梨郡上万力村字金桜鎮座

社記に大宮大椎現又金峯大権現と称すとあり。御朱印社領拾四石九斗余、成務天皇御宇鎮座、其の後落合の白山・熊野堂の熊野・岩下の走湯・別田の箱根を配祀して五所権現と称し、万力・落合・正徳寺・山根・矢坪・岩下・金塚・熊野堂・別田・小松・切差・赤柴膝立十二村の鎮守なり。天正十年三月織田信長乱入し、神主・社僧離散し殿堂大破に及びしを、徳川家康入国社領寄進によりて復興せしと伝ふ。付近に馬場・射場・相撲場・刺札場・桜畠・神子屋敷・祓戸等の旧址あり。社僧延命寺は退転して後淨家に改宗し、東光

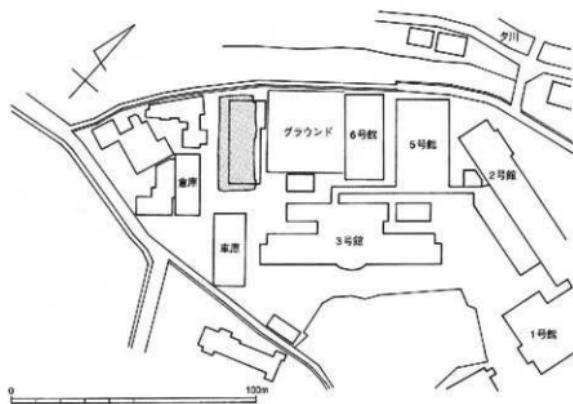


図2 厚生病院内建物配置と調査地区

寺村に一寺を建立し、大宮山誓願寺と称し現存せり。」

これによれば、延命寺は上万力金桜神社の神宮寺であったが、織田勢乱入後、退転して大宮山誓願寺に移ったといわれる。大宮山誓願寺は現在、甲府市東光寺にあり、浄土宗甲府五山のひとつとされる名刹である。『甲斐国志』によれば「文禄中古府ヨリ今ノ地ニ移レリ」とあるほか、当初建立されたのは下横沢町（現甲府市朝日町）ともいわれ、延命寺との関連については記されていない。仮に移転説が確かであるならば、誓願寺が山号を「大宮山」とするのは、大宮大権現とも呼ばれた金桜神社から採択したものであろう。

兜山については、山頂付近に「兜山の烽火台」が所在することが「日本城郭大系」で指摘されていたが、詳細な調査報告はこれまで行われていなかった。2005年3月に信藤祐仁、柳原功一、内田裕一らが踏査したところ、標高820m付近の岩場で10世紀前半の甲斐型土師器が散布するのが確認され、付近には水場、修行窟（座禅窟）とも考えられる人工的な岩穴（岩窟）があり、さらに付近には3段からなる造成面が存在することが判明した。3段の造成面は「兜山の烽火台」とされた遺構とは別地点で、堀切等の防御施設がないこと、10世紀前半の土師器が周囲の岩場などから採集されることなどに鑑み、山岳寺院（山林寺院）の一種、山房と考えられる（未報告）。

兜山の東側の沢を夕狩沢とい。甲斐守護武田信昌と跡部氏が戦った古戦場と伝えられる。寛正6年（1465）、夕狩沢の戦いで敗れた跡部景家は敗走し、小田野城で自害して跡部氏は滅び、武田氏は国内の実権を掌握したといわれる。付近に所在する矢坪の永昌院は信昌の創建で、境内には信昌の墓所と伝えられる五輪塔がある。県指定文化財の銅鐘は永和2年（1376）神取村大林寺で铸造、応永27年（1420）東光寺に移し、永正元年（1504）信昌により永昌院に寄進されたといわれる。そのほか聖徳寺（山梨市正徳寺）には信昌の摘子信繩の牌子があり、さらに下岩下（笛吹市春日居町）には武田信虎誕生屋敷がある。このように周辺には永昌院を中心として武田信昌に関連した古跡が多い。

今回の調査地点は現山梨厚生病院の敷地内である。山梨厚生病院は昭和26年12月、山梨療養所として設立され、昭和47年11月には温泉病院山梨療養所となり、その後平成2年に山梨厚生病院と改称し、現在では県内有数の総合病院となっている。

調査地点は旧山梨診療所の外来病棟が存在した場所で、平成2年まで外来病室として使用され、平成2年以降8号館という名称で旧施設は倉庫として使用され



写真1 授産施設「ひらしな」

ていたが、平成12年3月に建物は撤去された。現在は2004年に完成した「精神障害者通所授産施設 ひらしな」が開設されている（写真1）。

延命寺遺跡周辺には、山梨市教育委員会の詳細分布調査により、原ノ前遺跡（奈良）、金桜遺跡（绳文・平安）、地蔵久保遺跡（平安）など、いくつかの遺跡の分布が知られている。2002～2003年には山梨県埋蔵文化財センターにより西閻東自動車道予定地内で発掘調査が行われ、足原田遺跡、武家遺跡、中沢遺跡が調査された（図1）。足原田遺跡（山梨市万力）では延命寺遺跡と同時期の古墳時代前期の谷が検出され、多量の土器が出土した。豊穴ではなく、居住域との関連、遺構の性格は不明である。武家遺跡（山梨市上岩下）では、弥生時代後期の豊穴1軒、方形周溝墓2基以上が検出され、方形周溝墓は群集した状況を呈している。中沢遺跡（山梨市落合）では、奈良時代～平安時代初頭の豊穴7軒、古墳時代後期の溝1条が検出されている。これらの遺跡は、本遺跡と同様に山すそに近く、平等川流域に立地する点が共通する。そのほかにも周辺には間之田西遺跡など古墳時代の遺跡分布が知られ、笛吹川右岸には弥生時代末～古墳時代に密な集落域が形成されていたことが想定される。

参考文献

赤堀重樹 1996『甲斐国古社史考』

磯貝正義ほか 1980『日本城郭大系8 長野・山梨』新人物往来社

磯貝正義編 1995『日本歴史地名大系19 山梨県の地名』平凡社
佐藤八郎校訂 1998『甲斐国志』雄山閣

長沢宏昌ほか 2003『中沢遺跡・武家遺跡』『年報19』山梨県埋蔵文化財センター

小林弘典 2004『足原田遺跡』『山梨考古』92 山梨県考古学协会
宮澤公雄 2004『湯ノ内遺跡』（財）山梨文化財研究所ほか

第3章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法

調査は先述したように、2003年6月3日から8月7

日まで、約2ヶ月間行われた。発掘調査の経過でも記したとおり、山梨市教育委員会の試掘調査の結果、建物建設予定地全面から土師器などの遺物が出土したため、全城を調査対象とし、廐上置き場の関係上、南半、北半の順に廐土を反転して調査することとした。

調査の方法は以下のとおりである。重機により表土を除去した後、人力で精査を行い、遺構確認をした。国家座標に基づき調査区内に5mグリッドを設定し、杭を打設した。出土遺物は光波トランシットによってX(北方向)、Y(東方向)、Z(標高)の3次元データを測定し、台帳に記載した。遺物は通し番号で取り上げ、後日図面にドットを落とした。遺構平面図も同様に光波によって測点を取り、平面図上にドットを落としながら現場で平面図を作成した。土坑、ピットについては10cmメッシュを張った取り枠により図化を行った。また堅穴、土坑、ピット、竈等は通常どおり、断面観察、図化ののち、完掘した。全体図作成については、

空撮ができなかったため光波測量図のみとし、等高線データを加えた。俯瞰写真は病院建物屋上からの斜め写真を撮影した。

調査した面は北半で1面、南半では一部2面で、南半では上層で溝を調査した後、下層でピット等を調査した。

第2節 層序

調査区のほぼ中央、D2グリッド内に廐棄坑があり、その北壁を精査して土層堆積状況を確認した。

第7図に示したように、3層中に古墳時代から平安時代の遺物包含層があり、それ以下は砂層と土層の互層となり、地表下2.5mで礫層面となっている。重機で7層付近、地表下約1.5m付近まで掘り下げ、D3グリッド付近の5m四方程度を鏝鋸がけしたが、遺物は皆無であり、今回の調査区内では3層以下に遺物包含層はない判断した。

第3節 遺構

古墳時代～平安時代の堅穴8軒、土坑7、ピット56、溝12のほか、井戸1、石組2などが検出された。旧病棟に関連した廐棄坑(擾乱)が隨所に存在したため、遺構の遺存状況は不良であった。以下、個々の遺構について、番号順に説明する。

(1) 堅穴建物

堅穴建物は計8軒検出されたが、うち2軒(5・8号堅穴)についてはプランが不明確で、堅穴建物と断定するのは難しい。堅穴の時期については、古墳時代初頭以降、平安時代末まで断続的に認められている。

1号堅穴(第2図) D-E5グリッド、調査区東壁に接して位置する。主軸方向はN40°-E、20m四方の隅丸方形の小型堅穴で、竈は明確ではないものの、竈と考えられる焼

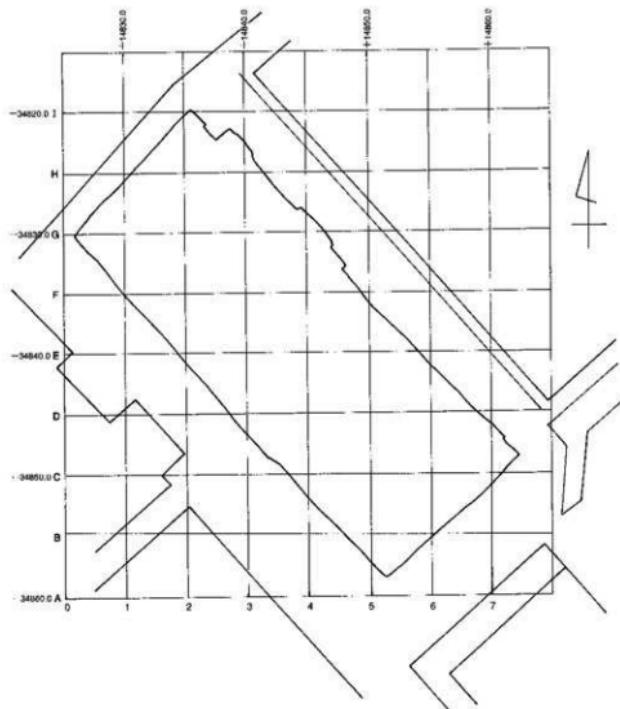


図3 調査地区と座標(グリッド幅は5m)

上分布が北西コーナーにあり、一応、コーナー竈と考えた。竈には袖石、天井石に相当する構築材はない。焼土は竈底面ではなく、覆土中にブロック状に存在した。竈内からはわずかに上師器片、平瓦が出土している。床面は全体に軟弱で、硬化面はない。貼り床を想定して床面を除去したところ、明確な貼り床ではなく、西壁に接して1号土坑が検出された。竈穴以前の土坑と思われる。壁は全体的に緩やかで、不明瞭であり、とくに東壁が漠然としている。周溝、柱穴は確認されていない。覆土中には礫が混じっている。遺物は床面から浮いて10世紀後半の土師器が少量出土し、竈周辺に散在するが、全体に少ない。規模が非常に小さな竈穴であることから、通常の居住施設としての住居ではない可能性がある。

2号竈穴（第2図） C6グリッドに位置する一辺3.6mの竈穴で、東側は約半分が調査区外にかかっているが、隅丸方形の竈穴と考えられる。西側では3号竈穴を切って重複する。中央付近に1.5m四方、深さ60cmのセメント製の四角い枠が床面以下に構築され、汚泥が堆積しており、山梨診療所時代の下水の水溜めと思われる。主軸方向はN52°-E。竈は調査区内ではなく、調査区外に存在すると思われる。床面はやや軟弱で、際立った硬化面はない。焼土ブロックが床面上に散在して確認された。周溝、ピットはない。壁は西・南側で遺存状況が良好であったが、構築面の土質との区別がしつよい部分があり、もう少し広がる可能性もある。南壁際には9世紀後半の甲斐型壺3個体が床面から11~12cm浮して並んで出土し、そのうち1個には外面に「四」あるいは「目」の焼成後線刻文字をもつ（2号竈穴1）。全体に遺物量は少なく、床面からの出土はほとんどない。

3号竈穴（第2図） C6グリッドに位置し、北側を搅乱に大きく切られ、東側を2号竈穴に切られた竈穴である。掘り上がりの姿は2号竈穴より古いように見えるが、2号竈穴覆土中に床面が存在した可能性もあり、確定な切り合ひ関係は定かではない。西壁の一部が残るのみのため、竈穴規模は不明であるが、南北2.6m以上の隅丸方形の竈穴住居と考えられる。南側は溝状の落込みに切られ、地山の礫層が露出している。主軸方向はN60°-E。竈はない。床面には中央付近を中心とする硬化面が広がる。床面には一部礫層が露出することから、硬化面下は地山と考え、貼り床の有無は調査していない。西壁の立ち上がりはやや不明瞭で、周溝、ピットはない。床面からは瓦あるいは鉄型陶器かと考えられる縦目状压痕を外側にもつ上製品が出土している。全体に遺物は非常に少なく、床面直上の遺物も土

製品以外にない。

4号竈穴（第3図） B5グリッドに位置する。東壁、中央わずかに東南隅寄りに竈をもつ一辺3.2mの竈穴で、西に向かってわずかに傾斜する地形のためか、西壁は遺存していない。東壁を除き壁は不明瞭であり、一部サブトレーンで確かめたが、全体に不明瞭であった。主軸方向はN52°-E。周溝は北壁下の一部を除いて全周囲するものと思われる。床面には壁際を除き硬化面が残る。竈は袖石を両脇に立てた石組の竈で、竈手前には焚き口となる掘り方があり、煙道は短い。袖石の石は北側に1個、南側に2個の砾を立て並べたもので、袖石の高さは30cm、袖石間の焚き口の幅32cmである。竈内には支脚石はない。竈内にはコーナー部分に浅いビットがある。遺物は床面上、床面近くから少疊出土し、11世紀前半、平安末の上師器碗、高台杯がある。貼り床と想定した床面を除去したところ、床下から5号土坑が検出された。竈穴構築時、あるいはそれ以前の所産と思われる。

5号竈穴（第3図） H1グリッドに位置し、調査区北東隅に検出された水溜め状石組（現代）と重複する竈穴造構で、23×12mが確認されたが、柱穴、周溝はなく竈穴住居と断定することは難しい。主軸方向はN30°-W。壁の高さは10数cmで、床面には51号ビットのほか、シミ状のビットが分布する。51号ビットは90×40cmの穴で、竈穴とは別造構としたが、一体の造構として理解すべきかもしれない。なお、水溜め状石組は方形に石積みを行い、敷地外の道路側溝から土管を通して導水するようになっており、石組中央にはコンクリートによる境が設けられている。

6号竈穴（第4図） F1グリッド付近に位置する。搅乱坑によって北西側を失した隅丸長方形の竈穴で、遺存部分で4×32mを測る。主軸方向はN40°-W。南側床面には地山礫を含む礫が露出し、覆土中にも大型礫が複数認められた。床面には明確な硬化面はない。周溝、柱穴はない。炉、焼土分布は確認できなかった。壁の立ち上がりは低く、不明瞭である。床面を除去したところ、床下に不整形の落込みが検出され、掘り方かと思われた。遺物は竈穴中央より南半に床面よりわずかに浮して散在して5個体以上のS字甕などが出土した。県史編年古墳Ⅲ期。

7号竈穴（第4・5図） F2グリッド付近に位置する。東側を搅乱坑によって大きく切られ、また西側は6号竈穴と重複する。遺存部分では46×3.7mを測る。搅乱坑の部分で床下を含む土層堆積状況を確認しているが、6号竈穴同様に竈穴プランは不明瞭である。主軸方向はN42°-W。床面には硬化面がなく、浅いシミ状

のピットが多数みられた。南西側では地山の礫層を含む標が露出する。壁の立ち上がりは浅く、周溝はない。ピット、炉は確認されていない。北西隅のはば床面上にわずかに遺物分布が認められた。古墳前期。

8号竪穴(第5図) G3グリッド、1号石組北側の1号井戸周辺、調査区境付近に6.6×29mの規模で確認された隅丸方形の竪穴。竪穴プランは不明瞭で、サブトレレンチで土層をチェックしたが、竪穴としては暖昧な造構といえる。主軸方向はN50°E。床面に硬化面はなく、柱穴、周溝、炉はない。遺物は非常に少なく、時期不明ではあるが、古墳初頭～前期の可能性がある。

(2) 土坑

柱穴よりも規模の大きなものを土坑とした。7基あり、うち2基は竪穴床下検出例である。

1号土坑(第8図) D5グリッド内、1号竪穴床下で検出された楕円形の土坑。125×108m、深さ12cm。古墳前期の土師器片が出土したことから1号竪穴に伴うものではない。

2号土坑(第8図) D3グリッドにあり、4号ピットと重複する。0.9×0.9m、深さ8cmの円形の上坑。古墳前期か。

3号土坑(第8図) D4グリッドにあり、6号溝と重複する。1.9×1.2m、深さ16cmの楕円形の上坑。古墳前期か。

4号土坑(第8図) E4グリッド内、8号溝と重複する。1.1×0.9m、深さ18cmの楕円形の土坑。

5号土坑(第8図) B5グリッド内の4号竪穴床下で検出された。0.9×0.7m、深さ10cmの不整円形の土坑。

6号土坑(第8図) F4グリッド内、1号石組南に位置する円形土坑。0.9×0.85m、深さ26cm。

7号土坑(第8図) H2グリッド内、8号竪穴北側に接して位置する。1.0×0.7m、深さ20cmの楕円形土坑。北側を搅乱坑により切られる。

(3) ピット

遺物が出土したピットを中心に58号ピットまで番号を付けたが、ほかにいくつかの小ピットがある。ピットはD4・D5・G1グリッドを中心に分布し、個々のピットについては第8～11図のとおりである。掘立柱建物の柱穴を示すような明確な配置はないが、39～43・49号ピットは長さ6.3mにわたって直線的に並び、掘立

柱建物の一辺、あるいは横列状柱穴列として理解しておく(図4)。そのほか、全体図(第1図)の図上で見るかぎり30・38号ピットを結ぶラインと30号ピットから16号ピットをつなぐ直角方向に派生するライン上に位置するピットが掘立柱建物となる可能性はある。

(4) 井戸

1号井戸(第11図) G3グリッドに位置する。直径0.9m、深さ0.65mで、最上面は縁を固定するようにセメントが貼られている。南側には井戸に付随するよう配石が認められる。井戸内の南側石積み中には、井戸底から28cm上、上から60cm下の石積み中に、差し込むようにして刀子(短刀)が1点出土した。井戸発掘時の祭祀行為とも思われるが定かではない。石積みの裏込め石中には、瓦等が混じり、明治以降構築の可能性がある。

(5) 石組

1号石組(第12図) G4グリッド付近、1号井戸南側に位置し、東側が調査区ラインにかかるて検出された、1.8×3.7m、深さ1.3mの長方形水溜め状石組。当初は完掘予定ではなかったが、大雨により調査区東壁が崩落し、東側の石積みが現われたため、調査区を一部拡張する形で全掘した。石積み方法は、いわゆる矢羽積みで、基底部には大型礫を並べ、基底部以外の石積みは、やや小型の礫を積み上げている。東面の石積みは高さ1.75mと高く、それ以外の石積みは1.2mと少し低い。低い方は削土によって低くなった可能性はある。内部からは、底近くから山梨診療所時代の食器類ほか、陶器類などの廃棄物が出土した。

(6) 溝

計12本検出され、調査区に対して直交するように構築されたもの(1・8・9・11・12号溝ほか)と南北方向に構築されたもの(6号溝)を主とするほか、それ以外の方向を示すもの(10号溝)がある。単独で存在するものと、2本平行するように配置するものがあり、後者については道路側溝の可能性がある。素掘りの溝のほか、石組みの溝(3号溝)がある。

1号溝(第6図) C4・D5グリッド付近にあり、北東から南西にほぼ直線的に通る溝。長さ10.1m、幅0.3～0.6m、深さ14cm(壁断面では深さ30cmを確認)で、西端は搅乱坑により切られている。

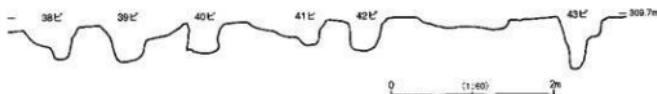


図4 ピット列断面

2号溝（第2図） B6・C6・C7グリッドの2・3号竪穴南側にあり、1号溝と同様に北東から南西方向には直線をなす。B6グリッド内で消失している。長さ6m、幅0.4m、深さ10数cmを測る。出土遺物から10世紀後半か。

3号溝（第6図） 調査区南端のB4グリッド付近に位置する。石列によって構築された溝で、調査区内で長さ5.7mを確認した。幅20cm、深さ35~50cm。緩やかに弧を描き、弧の外側にあたる北東側の石列中には約1.5~1.8m間隔で大型礫が置かれている。当初、暗渠排水施設かと思われたが、蓋にあたるものがないことから、溝とした。大型礫は円錐で、礫石のような平面はない。意匠としての置石か、何らかの機能をもつものか不明である。石列は一部2段に積み上げられている。天目茶碗から近代の磁器まで認められることから、江戸以前。

4号溝（第7図） C5グリッドにあり、北西から南東方向に通り、5号溝とはほぼ直角に交差している。長さ4.0m、幅0.3~1.0mと短い。深さ12cm。

5号溝（第7図） C5グリッドにあり、4号溝と直交する溝で、長さ27m、幅1.1m、深さ18cmを測る。北東から南西に直線的にのび、北東側では擾乱坑によって切られている。

6号溝（第7図） C5~E5グリッド付近にあり、北から南に向かってわずかに蛇行しながら直進する、幅が広く浅い溝。長さ18m、幅1.1~1.8m、深さ5cm程度で、溝断面は皿状をなす。南端は3号溝周辺に認められる削平により、欠失している。4号竪穴を切るように見えるが、4号竪穴の方が新しく、6号溝が4号竪穴を切っているわけではない。両者ともにその周辺で削平されたような状況を呈する。北側で1号竪穴に切られている。遺物は散在して出土し、他の溝よりは遺物量が多い。

7号溝（第7図） C3・D4グリッドにあり、北東から南西に向けて緩やかに弧状に曲がる。長さ8m、幅0.3~1.3mを測り、覆土中には礫が入る。時期は遺物から10世紀後半~11世紀代。

8号溝（第7図） D4・E4グリッドに位置し、南西側15mにある9号溝と平行するように直線的に構築されている。南東側には3mの間を置いて4号溝があり、さらに北西側の延長線上には11号溝、あるいは12号溝が位置することから、それらは本来一体のものであった可能性がある。8号溝と9号溝の組み合わせ同様に、11号溝と12号溝が平行することから、道路状構造として理解できるかもしれない。ただ8号溝の北西端には大きな擾乱があり、8・9号溝と11・12号溝をつなぐ中

間の様相は残念ながら不明となっている。長さ9.5m、幅0.5~1.1m、深さ15cmを測る。

9号溝（第7図） D3・D4グリッドにあり、8号溝と平行するように北西から南東に直線的に構築されている。北西端は擾乱により切られている。長さ8.5m、幅0.3~0.8m、深さ約6cmを測る。出土上器から古墳前期か。

10号溝（第7図） E4グリッドに位置し、南東端は6号溝に連続、あるいは切られて重複する直線的な溝である。長さ4.5m、幅0.4~0.5m、深さ数cmを測る。出土遺物から古墳前期か。

11号溝（第7図） G2・H1グリッドに位置し、北西から南東へ断続的に屈折した溝である。12号溝と約1.8mの間を置いてほぼ平行する。12号溝とは中央でH状に連結した溝があり、これも11号溝の一部とした。長さ1.8m、幅0.5m、深さ約5cm。

12号溝（第7図） G2・H2グリッドに位置する。11号溝と平行するわずかに曲がった溝で、中央に50~59号ピットが溝と重複する。長さ4.7m、幅0.4~0.5m、深さ約6cmを測る。

第4節 遺 物

ここでは遺物図版順に各遺構の出土遺物を説明するとともに、その他の出土資料について付記する。出土遺物量については、全体の重量で示したほか、必要があれば破片数を示した。

1号竪穴遺物（第13図） 1~4は上部器坏。いずれも甲斐型土器直後、山梨県史編年（県史編年）でいう奈良平安Ⅲ期（10世紀後半）とされる。やや薄く、口縁部は玉縁が残り、体部下半のヘラケズリはない。1は底部糸切り痕をそのまま残し、底部が円柱状に厚みをもち、粘土円柱作りを示唆する。5は高坏で、古墳時代後期初頭（県史編年古墳Ⅳ期）か。6は10世紀前半の甲斐型坏。7は甲斐型壺で、口縁部は肥厚する。8は窓内から出土した1枚作りの平瓦片で、画面には糸切り痕が残り、布目痕ではなく、酸化炎焼成である。厚さ1.4cmとやや薄く、側面は鋭角にヘラケズリされ、画面に付着した多量の離れ砂が特徴的である。本竪穴からは図示資料を含め計1400gの土器類が出土し、大半は小破片化した古墳時代前期のS字壺などである。竪穴の時期を示す奈良平安Ⅲ期についてはほかに10数片があり、全体に少ない。坏かと思われる須恵器片も2片ある。

2号竪穴遺物（第13図） 1~3は甲斐型土器器坏で、いずれも体部内面に放射状暗文をもち、体部外面上半に1は手持ちヘラケズリ、2・3は回転ヘラケズリを

施す。1には体部外面に焼成後線刻があり、「日」または「四」と判読できるが、何らかの記号かもしれない。見込み部には暗文はない。県史編年でいう奈良平安Ⅳ期（9世紀前半）。2は底面から底部付近が磨滅し、調整が判りにくくなっている。いずれもほぼ同じ器形である。4は県史編年でいう古墳Ⅲ期（古墳前期末）と考えられる器台である。5は県史編年奈良平安Ⅸ期（11世紀後半）あたりに位置づけられる土師質土器坏で、出土地点が3号竪穴に近いことから仮に3号竪穴が新しいとすると、3号竪穴埋藏遺物の可能性が高い。6は平安時代の須恵器壺で、やはり1~3同様に南壁付近から出土し、土師器と同時期かと思われる。計2300gが出土し、小破片の多くは古墳前期である。須恵器蓋、壺の小破片1点ずつが出土している。

3号竪穴遺物（第13図）1・2は口唇部にキザミをもつ單純口縁壺で、県史編年古墳Ⅱ期か。3は外面（背面）に縦目状圧痕、内面（凹面）に縦状圧痕をもつ円筒形、もしくは容器状土製品で、瓦あるいは鉄型関連の上製品と考えられる。1・2の土師器とは時期の違うものと思われ、2号竪穴と同様に平安時代末の所産か。縦目状を呈すところが平安時代の瓦に共通するが、丸瓦とすると厚みが厚い。軒丸瓦の可能性もあるが、厚みが均一な点も瓦とは異なる。3は重量1310gで、そのほかに840gの上器が出土している。大半は古墳時代前期の小破片である。2号竪穴で記したように、本竪穴は県史編年奈良平安Ⅸ期の可能性があるが、同時期の破片は数点にすぎない。

4号竪穴遺物（第14図）1~4は土師質上器坏で、器壁はやや厚く、口縁も玉縁ではないことから甲斐型直後よりも1段階程度新しい。県史編年奈良平安Ⅸ期（11世紀前半）と考えられる。1~3はロクロナデ、底部系切り未調整。4はロクロナデではなく何らかの整形技法で製作、調整された坏で、内外面ともにナデが多用されている。5はハ状の高台をもつ土師質上器で、坏部形態は1~3と類似する。6は磨り石で、使用痕は顕著ではない。出土遺物量は6の石器（568g）を除くと1230gである。図示資料以外に奈良平安Ⅸ期の遺物は数点と少なく、小破片は古墳前期等で占められる。

5号竪穴遺物（第14図）1は壺底部で、内外面ともにヘラミガキが施される。51号ビット（第15図）出土の高坏、あるいは壺は本竪穴に埋藏する可能性があり、時期は弥生末（県史編年弥生6期）かと思われる。土器の出土量は580gと少なく、ほとんどが古墳時代前期のS字壺小破片である。

6号竪穴遺物（第14図）1は壺または高坏。2は内

面折り返し口縁の壺または壺で、内面にコゲが付着する。3~7はS字口縁台付壺（S字壺）で、いずれも外面ハケメ、内面継ナデ（4は一部ハケメ）調整をもち、肩部に横ハケメをもたない一群で、県史編年古墳Ⅲ期（古墳前期末）の特徴をもつ。全体的に肩上半のハケメの施用間隔が粗くなっている。8は同じくS字壺の台部であろう。端部は内側に折り返し、指頭圧痕をもつ。出土量は計2450gで、ほとんどが古墳時代前期で、図化資料以外に赤彩畫片2、キザミ口縁の壺片1がある。そのほか奈良平安Ⅸ期壺の土器もある。

7号竪穴遺物（第15図）1は高坏脚部で、脚部に2段の円孔が貫通する。2は内外面にハケメをもつ単純口縁の小型壺で、煮沸痕をもつ。3は台付壺底部片。いずれも古墳前期であろう。計950g出土し、ほとんどが古墳前期である。

8号竪穴遺物（第15図）1は鋸齒状沈線をもつ壺脚部で、古墳前期初頭のいわゆるパレス壺である。第17図4と類似する。2は内外面にハケメをもつ単純口縁壺。3は折り返し口縁をもつ壺。そのほか図示していないが肩部に横ハケメをもつ壺片がある。土器は計560g出土。

1号土坑遺物 図示できる遺物はない。計11片、110g出土し、全て古墳前期の上器器片である。

2号土坑遺物 図化資料はない。古墳前期と思われる土器片2点、24g出土。

3号土坑遺物（第15図）1は小型壺、2は壺で単純口縁である。3は台付壺の台部。計460g出土。S字壺の破片は少ないが、時期は古墳前期か。

4号土坑遺物（第15図）1は内面横ハケメをもつ単純口縁壺。計142g出土。時期は定かではないが、古墳前期か。

5号土坑遺物 出土上器はなく、時期不明。

6号土坑遺物 計40gの土器が出土。古墳前期と思われるが定かではない。

7号土坑遺物 計72g出土。ほとんどが同一個体と思われるS字壺片で、県史編年古墳3期。

1号ビット遺物 1片、2g出土。時期不明。

2号ビット遺物 高坏脚、S字壺片など15片、45g出土。古墳前期か。

3号ビット遺物（第15図）1はハの字に長く広がった器台脚部。計10片、82g出土。古墳前期か。

4号ビット遺物 1片、80g出土。全て古墳前期か。

5号ビット遺物（第15図）1は内外面に密な継ヘラミガキをもつ碗か。計2片22g。

6号ビット遺物 古墳前期壺2片、66g。

- 7号ピット遺物 高坏脚片など2片、30g。
- 8号ピット遺物 古墳前期壺片、平安時代10世紀後半？土師器坏など6片、40g。
- 9号ピット遺物 古墳前期と思われるやや大型の壺片など10片、120g。
- 10号ピット遺物 肩部横ハケメをもつS字壺1片ほか、3片、20g。古墳2期か。
- 11号ピット遺物 18片、172gとやや多くの土師器が出士。古墳前期。
- 12号ピット遺物（第15図） 1は口縁部が薄く広がる単純口縁の壺。古墳前期か。計10片、72g出土。
- 13号ピット遺物 1片、4g。古墳前期か。
- 14号ピット遺物 高坏脚など2片、14g。古墳前期か。
- 15号ピット遺物 4片、32g。古墳前期。
- 16号ピット遺物 S字壺片1片、6g。
- 17号ピット遺物 時期不明。
- 18号ピット遺物 時期不明。
- 19号ピット遺物 時期不明。
- 20号ピット遺物 S字壺1片、10g。
- 21号ピット遺物 台付壺底部のほか、無節繩文が施文された破片1あり。46g。
- 22号ピット遺物 時期不明。
- 23号ピット遺物 時期不明。
- 24号ピット遺物（第15図） 1は器台口縁部で、内外面に縦ヘラミガキをもつ。2は高坏と思われる脚部片で、外側は赤彩されている。古墳前期。計14片、140g。
- 25号ピット遺物（第15図） 1はロクロナデをもつ坏で、底部は糸切り未調整。県史編年奈良平安復期か。3片、72g出土。
- 26号ピット遺物 S字壺4片5g。古墳前期。
- 27号ピット遺物 壺底部1片、20g。
- 28号ピット遺物 S字壺片など2片、20g。古墳前期。
- 29号ピット遺物 S字壺片など4片、30g。古墳前期。
- 30号ピット遺物 壺片1、20g。
- 31号ピット遺物 時期不明。
- 32号ピット遺物 S字壺など3片、10g。古墳前期か。
- 33号ピット遺物 時期不明。
- 34号ピット遺物 時期不明。
- 35号ピット遺物 3片、10g。時期不明。
- 36号ピット遺物 器台片1、10g。古墳前期か。
- 37号ピット遺物 時期不明。
- 38号ピット遺物 2片、2g。時期不明。
- 39号ピット遺物 S字壺、壺片など4片、50g。
- 40号ピット遺物 時期不明。
- 41号ピット遺物 時期不明。
- 42号ピット遺物 S字壺片など15片、110g。古墳前期。
- 43号ピット遺物 S字壺片など5片、12g。古墳前期か。
- 44号ピット遺物 時期不明。
- 45号ピット遺物 S字壺など12片、64g。古墳前期。
- 46号ピット遺物 壺片2、15g。時期不明。
- 47号ピット遺物 S字壺5片、32g。古墳前期。
- 48号ピット遺物 4片、15g。時期不明。
- 49号ピット遺物 9片、65g。古墳前期か。
- 49号ピット遺物 時期不明。
- 50号ピット遺物 S字壺1片、6g。古墳前期。
- 51号ピット遺物（第15図） 1は内外面にハケメをもつ高坏あるいは蓋で、口縁部にはゆがみがある。外面は胎土帯の輪積痕が残り、調整は粗い。内面は横ハケメのうち部分的にナデを行う。口付部にも横ハケメをもつ。煮沸痕はない。胎土は粗く、壺に近い。形態的にも台付壺の胴下部に類似する。時期は不明であるが、台付壺との比較から弥生末～古墳前期か。その他10片、計480g。
- 52号ピット遺物 2片、2g。時期不明。
- 53号ピット遺物 S字壺1片、2g。
- 54号ピット遺物 1片、2g。時期不明。
- 55号ピット遺物 時期不明。
- 56号ピット遺物 時期不明。
- 57号ピット遺物 1片、1g。時期不明。
- 58号ピット遺物 1片、20g。時期不明。
- 59号ピット遺物 2片、2g。時期不明。
- 1号溝遺物（第16図） 1はS字壺の影響を受けたと思われる有段口縁壺。その他に古墳前期の土師器片が比較的多くあり、計955gが出土した。古墳前期。
- 2号溝遺物 計200g出土した。約半数が10世紀後半以降の土師器で、糸切り痕を残す底部片などがみられる。そのほか古墳前期の土師器が含まれている。
- 3号溝遺物 380gの陶磁器、鉄製品を含む遺物が出土。17世紀頃と思われる天目茶碗片、江戸期の灰釉陶器のほか、江戸後期～近代と思われる磁器片がある。鉄製品は箭頭と思われ、円形の滑車状を呈する。近世以降。
- 4号溝遺物 古墳前期と思われる上師器など50g出土。近世と思われる陶器も1点含まれる。
- 5号溝遺物 古墳前期を含む100gの上師器が出土しているが、時期不明。
- 6号溝遺物（第16図） 古墳前期から平安末までの遺物が含まれるが、図化したものは古墳前期が多い。器台・高坏（5～9）、S字壺（10・11）、有段口縁壺（12）、単純口縁壺（13～15）、台付壺脚部（16・17）のほか、平安時代かと思われる須恵器坏（4）、内面をパレットとした須恵器壺軸用硯（18）、県史編年奈良平安復期かと思われる土師質土器坏（3）がある。計3770gで、

わずかに平安時代までの土器がみられるものの、圧倒的な主体は古墳前期である。

7号溝遺物（第16図） 古墳前期器台脚部（2・3）、内面折り返し口縁の壺（壺）（4）、県史編年奈良平安Ⅳ期の上師質土器（1）がある。それ以外に平安時代の灰釉壺、10世紀後半の土師器などがある。計1120g出土し、そのうち2割程度が10世紀後半から11世紀代と思われる。

8号溝遺物（第16図） 1は折り返し口縁の壺口縁。古墳前期か。計800gの古墳前期の上師器片が出土。

9号溝遺物（第16図） 1は高口縁壺。780gの土師器が出土し、ほとんどが古墳前期であるが、10世紀後半の土師器も1点含まれる。

10号溝遺物（第16図） 1はII唇部にキザミをもつ單純口縁壺。計240gほどの土師器が出土しているが、S字壺など古墳前期に限られている。

11号溝遺物 時期不明。

12号溝遺物 時期不明の上師器1片、4g出土。

1号井戸遺物（第17図） 1は鉄製刀子（短刀）で、長さ25.4cm、幅27mm。約0.7cmの厚さをもつ。X線写真を撮影したところ、日付穴が1箇所あることが判明した。井戸の石組中に差し込まれたように出土したことから、井戸と同時期かそれ以前と思われるが、時期は不明。130g。

1号石組遺物（第17図） 石組下層から出土した陶磁器類のうち、食器類の代表的なものを取り上げ、図化した。1～8は山梨療養所時代の食器類で、1・3は小皿、2は大皿、4は鉢、5・7は蓋付碗（弁）、8はご飯茶碗、6はその蓋かと思われる。皿・鉢には内面口縁部に縁の2本線、蓋、碗には口縁部外面に縁の2本線が付けられている。また3には「山梨療養所」、4には「山梨療養所厚生会」、5には「山梨厚生会」の文字が付けられている。いわゆる戦時下の国民食器の流れをくむ漸戸物の磁器と考えられる。9は「みずほ牛乳」の湯呑み茶碗。これらは昭和26年から、温泉病院山梨療養所と改称する昭和47年まで病棟で使用されたと考えられる食器である。1号石組が廃棄されたのはその間であろう。1350g以上出土。

遺構外遺物（第17～19図） 計21030g出土。1は縄文土器で、晚期前半、大洞B-C式並行土器の口縁部。縄文土器は1以外には出土していない。2・3は波状沈線をもつ壺脚部。弥生末～古墳前期か。4はいわゆるバレス壺（バレス・スタイルの壺、宮廷式上器）で、異系統土器である。肩部に2本組みの突番が2箇所巡り、突番下に鋸歯状沈線が施される。文様帯下端には斜めの刺突列が1条施されている。肩部と底部付

近の破片のため、図の器形は推定復元であるが、おそらく肩部中央やや下に最大径をもつ球形と思われる。突端部には赤彩が認められる。5～8は器台。9は壺口縁部、あるいは器台脚部で、内面調整の状況からすると脚部の可能性が高い。10は壺と思われる口縁部。13～15は高壺。17は折り返し口縁の壺口縁。18も折り返し口縁壺で、口唇部に2本組の棒状加飾が付けられる。19は有段口縁壺。23・24はS字壺で、肩部に横ハケメをもつ県史編年古墳Ⅱ期のS字壺B型。25・27～31は単純口縁壺で28には口唇にキザミをもつ。10は須恵器壺で、時期は器形からすると9世紀後半の平安時代か。32～34は11～12世紀の土師質土器で、33・34は県史編年奈良平安X期。32はⅦ～Ⅹ期か。

第4章 総括

延命寺遺跡では、今回の調査によって古墳時代前期、平安時代の堅穴建物、古墳時代の溝、近世から現代と思われる井戸、石組等が検出され、遺構内外から縄文時代晚期、弥生時代末～古墳時代前・中期、平安時代9世紀中葉～11世紀代の遺物が出土した。そのほか遺跡は山梨厚生病院構内に立地することから、調査区付近に以前存在した病棟関連の廃棄物が多く出土し、中には昭和26年開設を物語る「山梨診療所」と印された食器類も出土し、名称を変えて発展を遂げた山梨厚生病院にとってみれば、今日では貴重な資料といえよう。遺跡の名称の出来となった「延命寺」に関しては、も

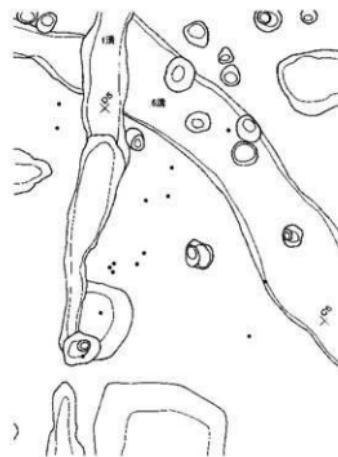


図5 パレス壺（第17図4）の出土状況

ともとどこに所在した寺院なのか突き止められていないが、上万力金桜神社の神宮寺として遺跡付近にあったことが想定される。調査区内でもその点を注意して調査を行ったが、寺院跡そのものの検出はない。出土資料中にも寺院関連の資料は見出すことができなかつたが、わずかに中世末に遡る可能性のある陶器（天目茶碗片）がある。1号石組、1号井戸、3号溝など、近世にさかのばる可能性のある遺構はあるものの、石積みの状況から中世までさかのばるものとは考えられない。井戸、石組は病院開設以前から存在したと思われるもので、かつて存在したと考えられる屋敷地に伴う施設であって、病院開設初期には機能していたと思われるが、昭和30年代前後には廃棄されたのであろう。病院関係者にお伺いしたが、井戸、石組の存在を知る人はいなかった。

古墳時代初頭～前期 古墳時代初頭については、異系統土器（非在来系土器）の存在が注目される。第17図4、第15図1のいわゆるバレス・スタイルの壺（バレス壺）2点で、時期は山梨で古式土器成立期とされる京原式段階、東海地方でいうところの元屋敷式並行期に相当し、東海西部に由来する。山梨県内では中山誠二氏の集成により身洗沢遺跡（笛吹市八代町）、二之宮遺跡（笛吹市御坂町）、坂井南遺跡（韮崎市）、上野遺跡（三殊町）、長田口遺跡（南アルプス市、旧梅形町）の計6遺跡からの出土が明らかとなっている。そのうち、身洗沢遺跡例、二之宮遺跡例が本遺跡例と形

態的にも、文様要素の面でも類似している。

図6の1は身洗沢例で、肩部に貼り付け隆帯が1条巡り、その下には横位の沈線間に配された山形文（線鋸齒文）が2段巡るもので、外面は全面赤彩された壺である。器面調整として外面に斜位のハケメ、内面にヘラケズリが認められるという。調整技法、文様構成、貼付文の断面形、赤彩壺である点が延命寺例と同じである。2は二之宮例で、やや低い突帯が巡り、上下に山形文が2条存在し、下端部には斜位の短沈線が巡っている。山形文間に「く」の字の連続沈線（綾杉沈線）のある点が異なり、また突帯の形態がわずかに異なるものの、おおよそ延命寺例、見洗沢例に類似した土器といえる。以上のように、山梨県内のバレス壺には、山形文を2段もち、山形文間に突帯が巡り、下端に斜位の短沈線が巡る赤彩壺が知られる。突帯自体は頸部と肩部の境に貼付された事例が多いようであるが、多角化して肩部にもみられるのは特徴である。県内での分布は、現状としては甲府盆地東側に偏り、ひとつの分布域を形成するものと推測できる。

バレス壺（宫廷式土器）については、浅井和宏氏が形態分類、変遷、分布についてまとめ（浅井 1986）、中山氏も引用しているが、中山氏によれば横線文と山形文をもつタイプは宫廷式土器E類に相当するとされる（中山 1991）。E類段階は口縁部形態をもとに古・中・新の3時期細分がなされているが、山梨県内の事例はいずれも口縁部を欠失するため詳細な時期は不明

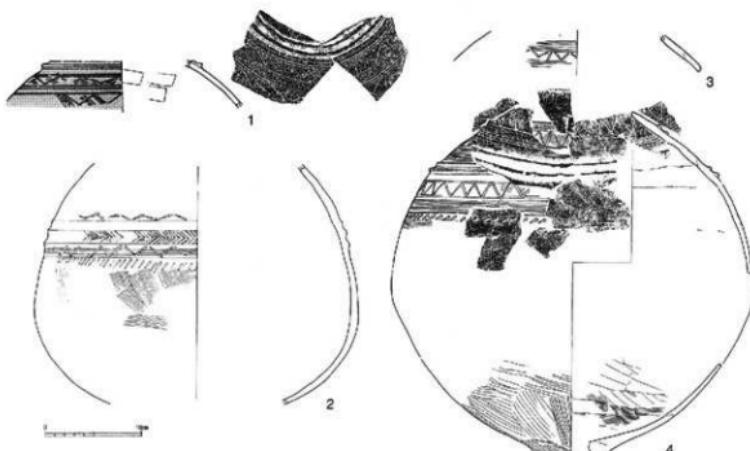


図6 山梨県内出土の「宫廷式E類」（1：身洗沢遺跡 2：二之宮遺跡 3・4：延命寺遺跡）

で、おそらく中、あるいは新段階と思われる。パレス壺は前半段階では知多半島を除く尾張を中心に分布していたが、E類段階になって東は群馬・栃木方面から西は大阪方面まで一挙に拡散するといわれ、とりわけ東日本への広域的な分布が注目される。山梨県の近隣では、松本市弘法山古墳出土例がE類新期とされ、信濃での古墳出現期の時期を示している。いずれにしても、東日本の古墳出現期において東海西部の強い影響下にあったことが土器様相から想像できるもので、S字壺の濃密な分布と合わせて当該期における東海地方との交流を示す事例といえる。本遺跡例のパレス壺の胎土観察によれば、粒径のやや大きな石英、赤色粒子を含み、在地的であり、文様要素にも甲府盆地としての地域性が認められることから、土器そのものの搬入ではなく、製作者の流入あるいは模倣として理解しておきたい。小林健二氏もこの点について「北関東西部地域などの強い定着性は認められないものの一定の形態を保持したものも見られることから、本県の様式に取り込まれていることは確かなようである」と指摘している（小林 1998）。

古墳時代前に關しては、不明瞭ながら2軒の竪穴が確認され、古墳時代3期という古墳時代前期後段階の集落の存在が明らかにされた。この時期に關しては周辺にいくつかの遺跡分布が知られ、とくに新環状・西関東道路建設に伴い山梨県埋蔵文化財センターによつて調査された足原田遺跡（山梨市方力）では谷状遺構

から土器捨て場が見つかり、多量の土器が出土した。古墳時代前期については、山梨市を含む甲府盆地東部地域での前期古墳は知られておらず、これまで注目されていない地域といえるが、足原田遺跡にみると山梨市を中心とした笛吹川右岸に相当な規模の大集落が広範囲に広がっていることがわかる。

上器に注目すると、6号竪穴では土器器蓋沸具はS字壺を主とし、わずかに模倣壺があるものの（1号溝1）、甲府盆地全体の様相と大差なく、地域性は薄いといえる。この時期は甲斐銚子塚が造られた時期にあたり、甲府盆地を中心とした甲斐地域の支配が強化された時期と思われ、S字壺の普及・定着化との関連が伺える。

小林健二氏によると、肩部横ハケメのないS字壺は、小林氏細分で古墳前期5期、IV類にあたり、東海系の影響は弱まり、在地化、定着したS字壺が変容した段階（変容期）とされる。その特徴としては口縁部の屈曲の不明瞭化、肩部横ハケメの消失、器形の長削化をあげ、新たな器種の出現を指摘する。さらに小林氏はこうした山梨県内にみられる地域型のS字壺を「甲斐型S字壺」と呼称することを提唱し、実年代については5期を4世紀第3四半期～第4四半期と推定する（小林 1998）。

6号竪穴のS字壺についてみると、小林氏のいう変容期の内容が必ずしも明確ではないが、内面の縦ナデ調整、外側の疎らなハケメ調整を指摘できるほか、第

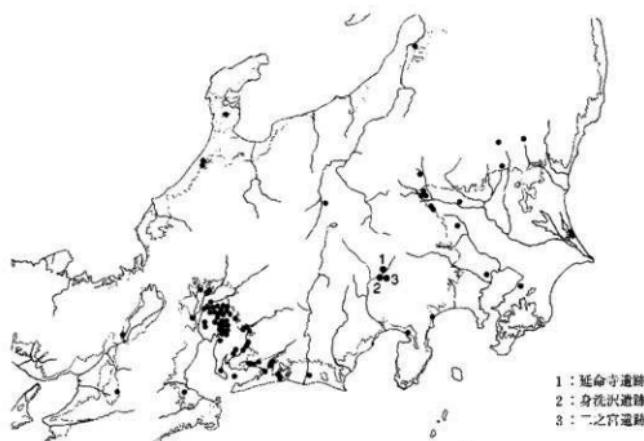


図7 「宮廷式E類」分布図（浅井1986に加筆）

14図4に見られる屈曲部境の横位沈線も特徴と思われる。本遺跡は弥生時代からの伝統的な集落とは言えず、古墳前期に集落が新たに出現する一例として理解されるが、とくに県史編年古墳3期には本遺跡のように集

落が増加、拡散した可能性があり、S字型の変容期とされる土器様相と関連させて考えることができそうである。

平安時代 3軒の平安時代の竪穴が検出され、9世紀前半（2号竪穴）、10世紀後半（1号竪穴）、11世紀前半（4号竪穴）と、各時期1軒ずつの散漫とした状況である。断続的ではあるが、長期にわたり居住域とされ、また平安時代末には足原田遺跡でも6軒の竪穴建物跡が見つかっていることから、この一帯が平安時代において比較的安定した環境であったことがわかる。またそばにある金桜神社は、平安時代に信仰の足跡が認められる御嶽信仰の里宮で、付近一帯の総鎮守とされていることから、仮に平安時代に神社があったとするならば神社周辺には居住域としての集落が広がっていたと見られる。

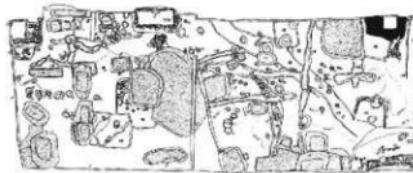
平安時代の竪穴出土遺物で注目されるのは、1号竪穴出土の平瓦片と3号竪穴出土の不明土製品である。前者には布目ではなく、画面に糸切り痕、指頭痕が残る。後者については布の代わりに筵、あるいはゴザ状の敷物を使用した瓦の可能性があるものの、断定はできない。平安時代以降の瓦出土地としては、本遺跡周辺では笛吹市春日居町の寺本庵寺、長谷寺境内、山梨市と塩山市の境にある七日子庵寺、塩山市放光寺、勝沼町大善寺がある。今後、瓦の比較を行い寺院を推定する必要があるが、今のところ類似する瓦は思い当たらない。平安時代では山林寺院が各地に建立され、各寺院のそばで瓦が生産されたらしいことから、本遺跡付近にも山中に寺院があったことが推測される。最近の調査で兜山に山房ではないかとされるテラス群が発見されているが、瓦は見つかっていない。1号竪穴出土の瓦は本集落の住人が瓦生産、寺院建立に係っていたことを示すものであろうか。3号竪穴の土製品については、凸面の圧痕が縦目と確認できるものではいが、筵目に類似した圧痕であり、山梨県内で類例を求めるべく、室屋遺跡（笛吹市境川村）で縦目をもつ平瓦が採集されており、平安時代とされている。3号竪穴の帰属時期が明確ではないものの、2号竪穴出土の壊から平安末（11世紀後半）の可能性があり、その場合、1号竪穴の瓦とは時間差が生じてしまう。

以上のべたように、延命寺遺跡では古墳時代前半、平安時代に集落として居住痕跡が確認された。とくに古墳時代初頭の東海西部の影響が強い土器の出土が注目されるほか、平安時代後半の瓦の出土についても周辺の寺院との関連性について注意しなければならない。また地名が示すように、金桜神社の神宮寺としての延命寺が存在したことから、金峰山信仰と

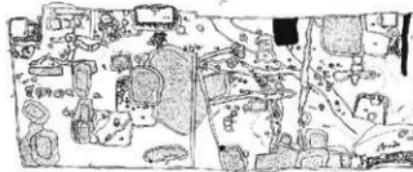
古墳前期



9C



10C



11C



近世～現代

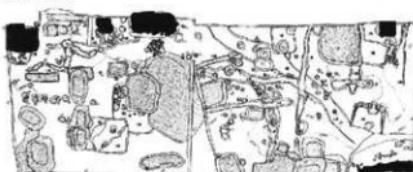


図8 遺構の変遷

の間わりも無視できないものと思われる。

最後になりましたが、本報告を刊行するにあたり、
(財)山梨厚生会 山梨厚生病院には遺跡の調査から
本書の刊行に至るまで、ご理解、ご協力をいただき、
心より厚く御礼申上げます。また山梨市教育委員会に
は調査、整理を通じてご指導、ご協力いただきました。
また関係諸機関、関係各位をはじめ発掘調査に参加さ
れた方々には改めて御礼申上げる次第です。本書が地
域史理解のための一助として活用されることを祈念し
ます。

参考文献

- 中山誠二 1991 「身洗沢遺跡における外來系土器群の諸例」『研究
紀要』7 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
浅井和幸 1986 「<宮廷式土器>について。『久山式土器とその前
後』」第3回東海埋蔵文化財研究会
小林弘典 2004 「足原田遺跡」『山梨考古』92 山梨県考古学協
会
小林健一 1998 「山梨県出土の東海系土器—波及と定着と変容—」
『山梨県考古学年報』10

表1 土器・陶磁器觀察表

表2 石器観察表

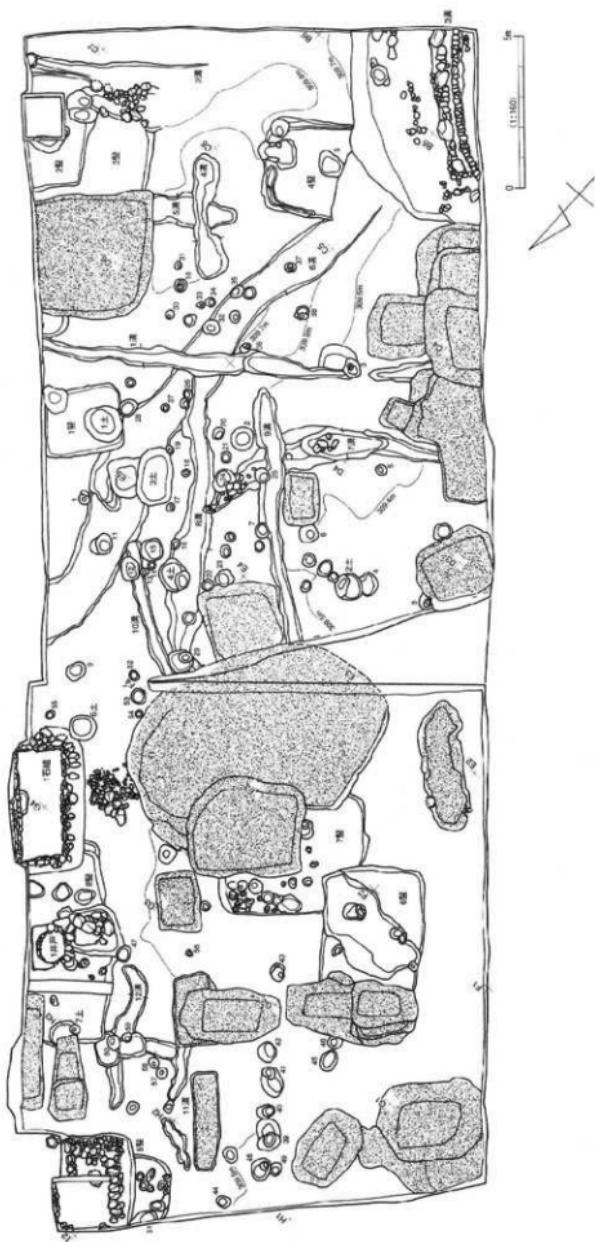
回数	地点	No.	分類	長/幅/厚	重さg	石材	色調	注記	備考
14	4号墳穴	6	磨り石	8.4/7.8/1.3	568	花崗岩	白褐色	268	研ぎ面は白い

表3 土製品観察表

回数	地点	No.	種別	時期	長/幅/厚cm 1/底/高cm	重さg	形状・接込等	色調	泥土	注記	備考
13	1号墳穴	8	平瓦	古～半	13.0/7.6/1.7	204	1枚作り、圓窓 離れ切口巻、ヘ ラケズ。末切 底	褐褐色	長、石、灰、青、白 新大・表面	642(1号墳)	表面灰に離れ切付有、右側なし
13	3号墳穴	3	不明土製品	不明	17.8/13.0/0.8	1080	端目・ゴザ?	暗褐色～黄褐色	長、大、石、 灰、堆	264	錐型小矢尻の可能性
19	遺構外	36	土製円板	不明	3.4/3.0/0.9	10	内外面ナゲ	褐褐色	灰、石、青	93	

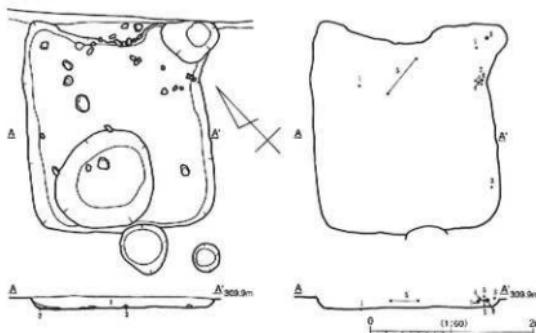
表4 金属製品観察表

回数	地点	No.	種別	材質	長cm	幅cm	厚さcm	注記	備考
17	1号井戸	1	刀子	鉄	25.5	2.8	0.7	973	目針穴あり

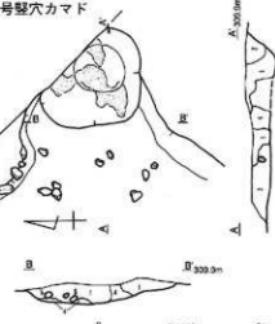


第1図 延命寺遺跡 調査区全体図(1:160)(網部は搅乱)

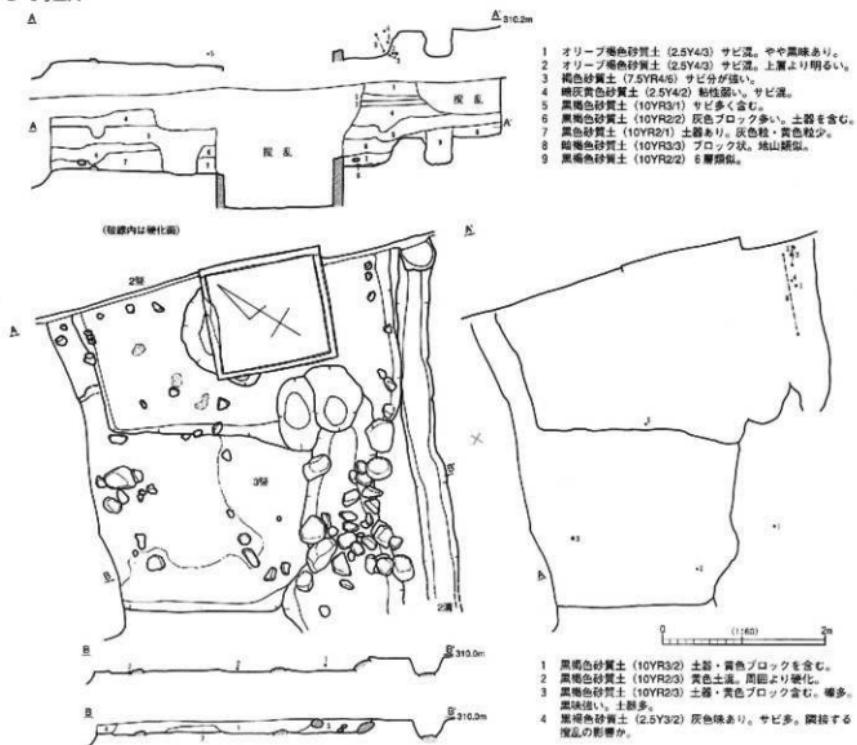
1号堅穴



1号堅穴カマド

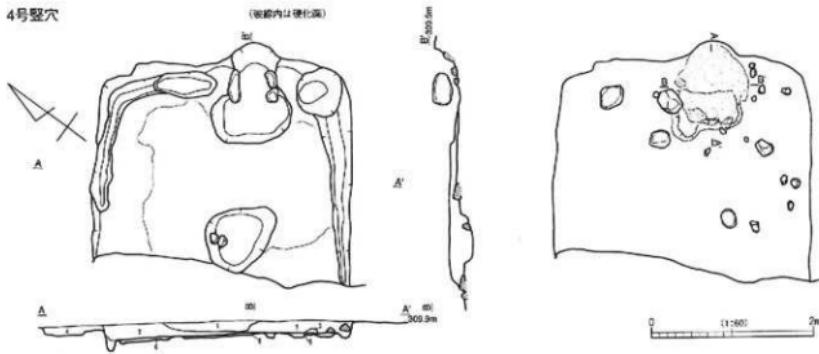


2・3号堅穴

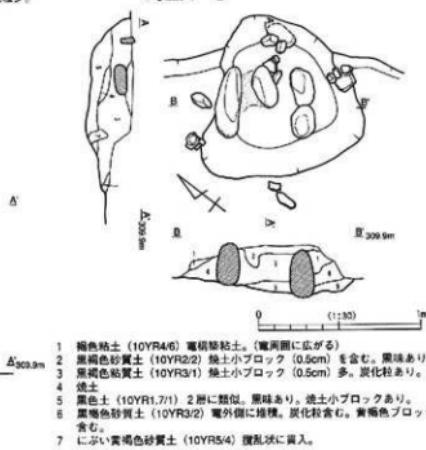


第2図 1～3号堅穴

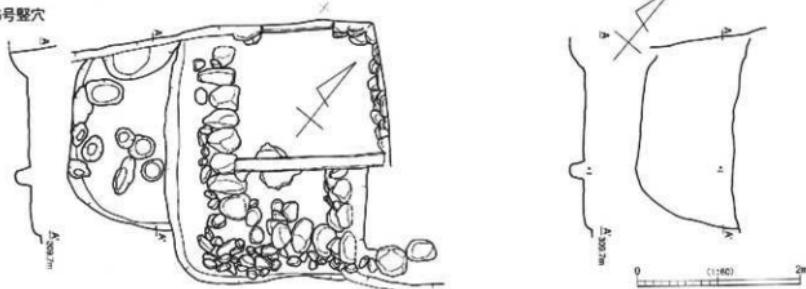
4号堅穴



4号堅穴 東

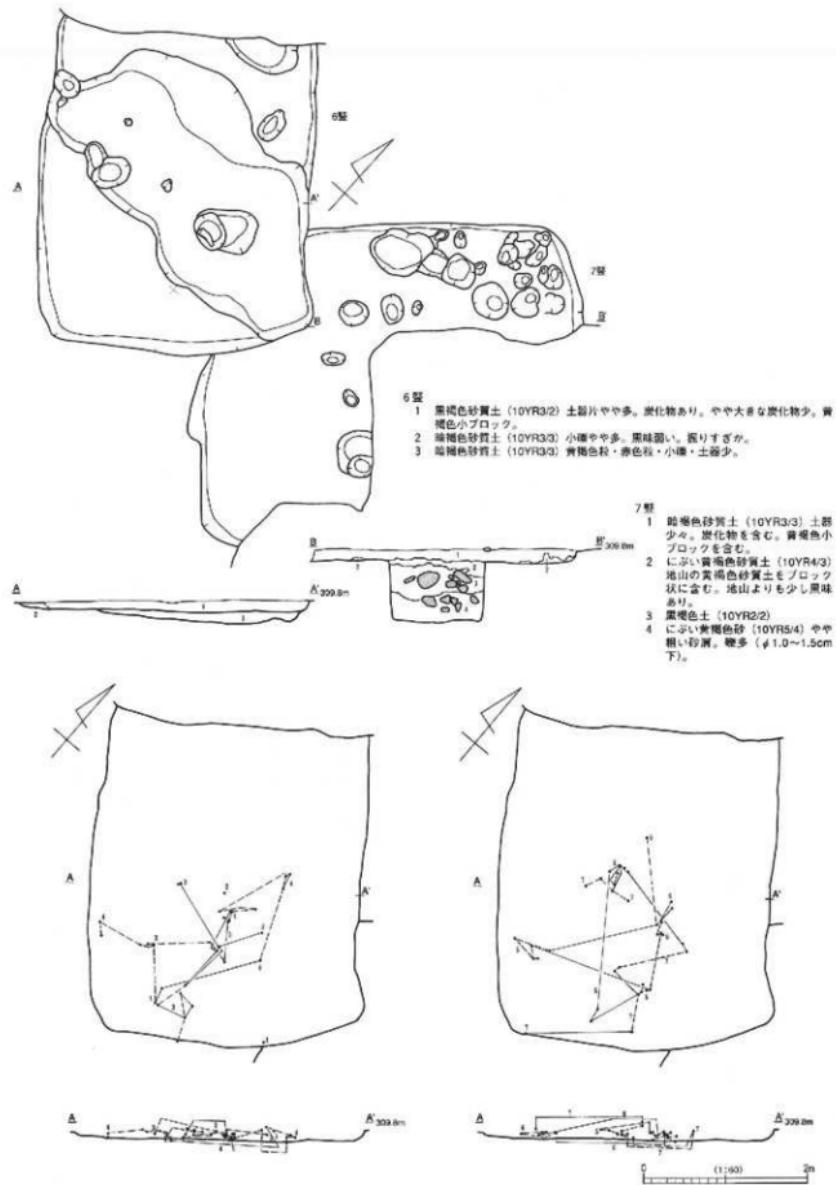


5号堅穴



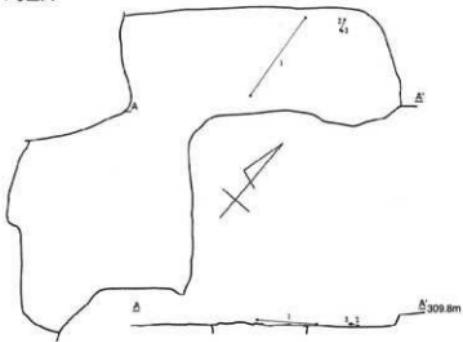
第3図 4・5号堅穴

6・7号堅穴

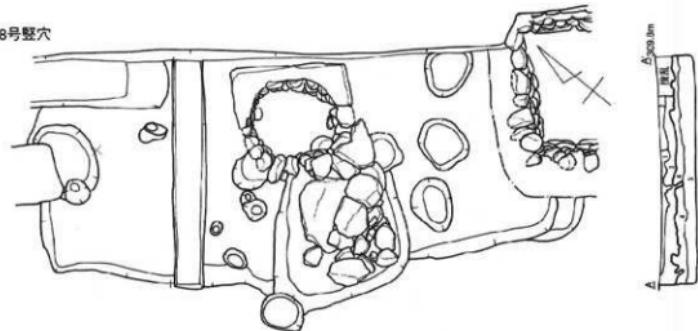


第4図 6・7号堅穴

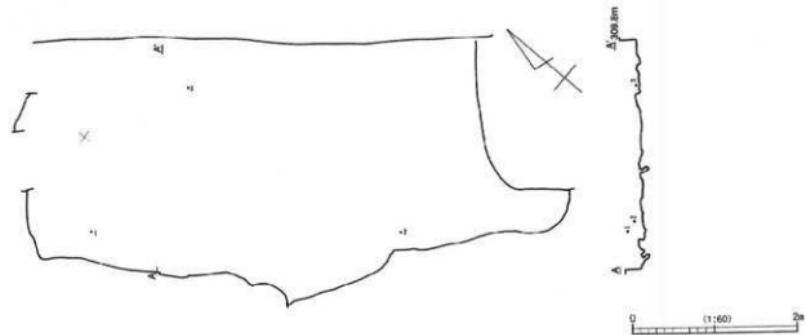
7号豊穴



8号豊穴

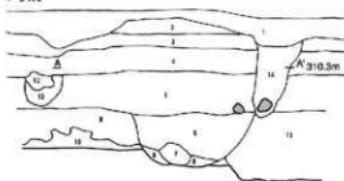


1. 深褐色砂質土。(0YRA42) 地下化粧土ブロック・炭化物少。
2. にふく青褐色砂質土。(10YRA43) 粘土ブロック・地土色濃。
3. にふく青褐色砂質土。(10YRA32) 黄褐色砂質土。
4. 深褐色砂質土。
5. 深褐色砂質土。(10YRA42)



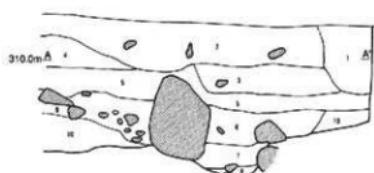
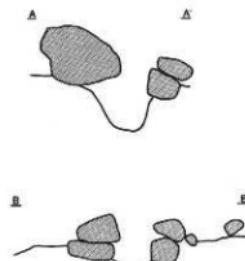
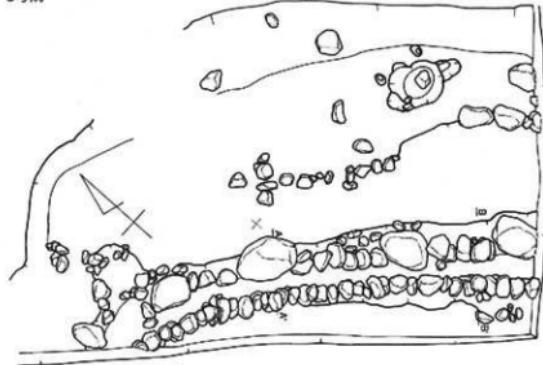
第5図 7・8号豊穴

1号溝



- 1 黒褐色土 (10YR2/2) 表土。黒色土主体。
- 2 黄褐色土 (10YR5/6) 旧水田止水層か。炭化土質。
- 3 沢黄褐色土 (10YR4/2) 旧水田土質か。
- 4 黄褐色土 (10YR4/4) 3層（上・中・下）に分けられる。4(上)と4(下)は共に旧水田止水層。間に3層と4色の灰褐色土が入る（4(中)）。
- 5 黒褐色土 (10YR3/2)
- 6 黑褐色土 (10YR2/2) 1溝の覆土。黒色土あり。
- 7 にぶい黄褐色土 (10YR4/2) ブロック状。表面土中。
- 8 黑褐色土 (10YR3/2) 5層弱。黒色土中に黄褐色土を多く混入する。
- 9 黑褐色土 (10YR3/2) 10層のブロックや多。
- 10 にぶい黄褐色砂質土 (10YR4/2) 滅構壁経路。
- 11 黑褐色土 (10YR2/2) 6層よりも褐色味が強い。下層は暗層面。
- 12 黄褐色土 (10YR4/2)
- 13 にぶい黄褐色土 (10YR4/2) ブロック状。
- 14 黑褐色土・黄褐色土混合土。

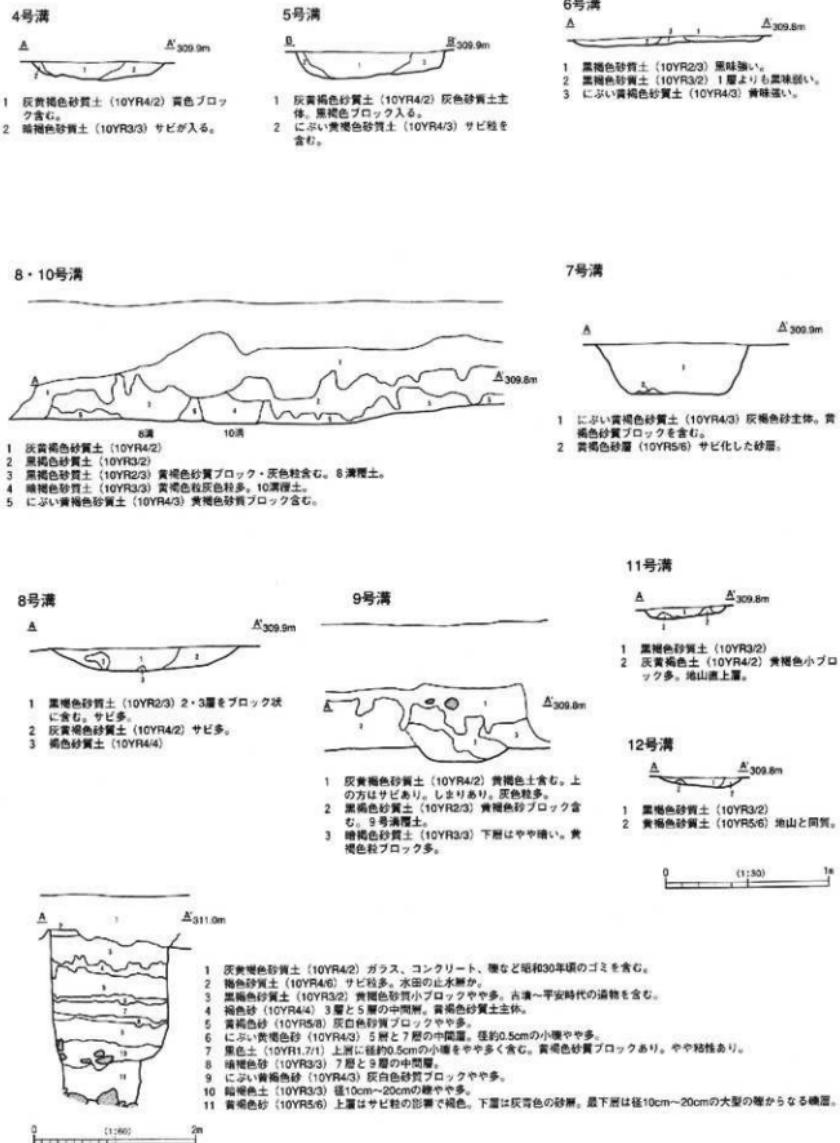
3号溝



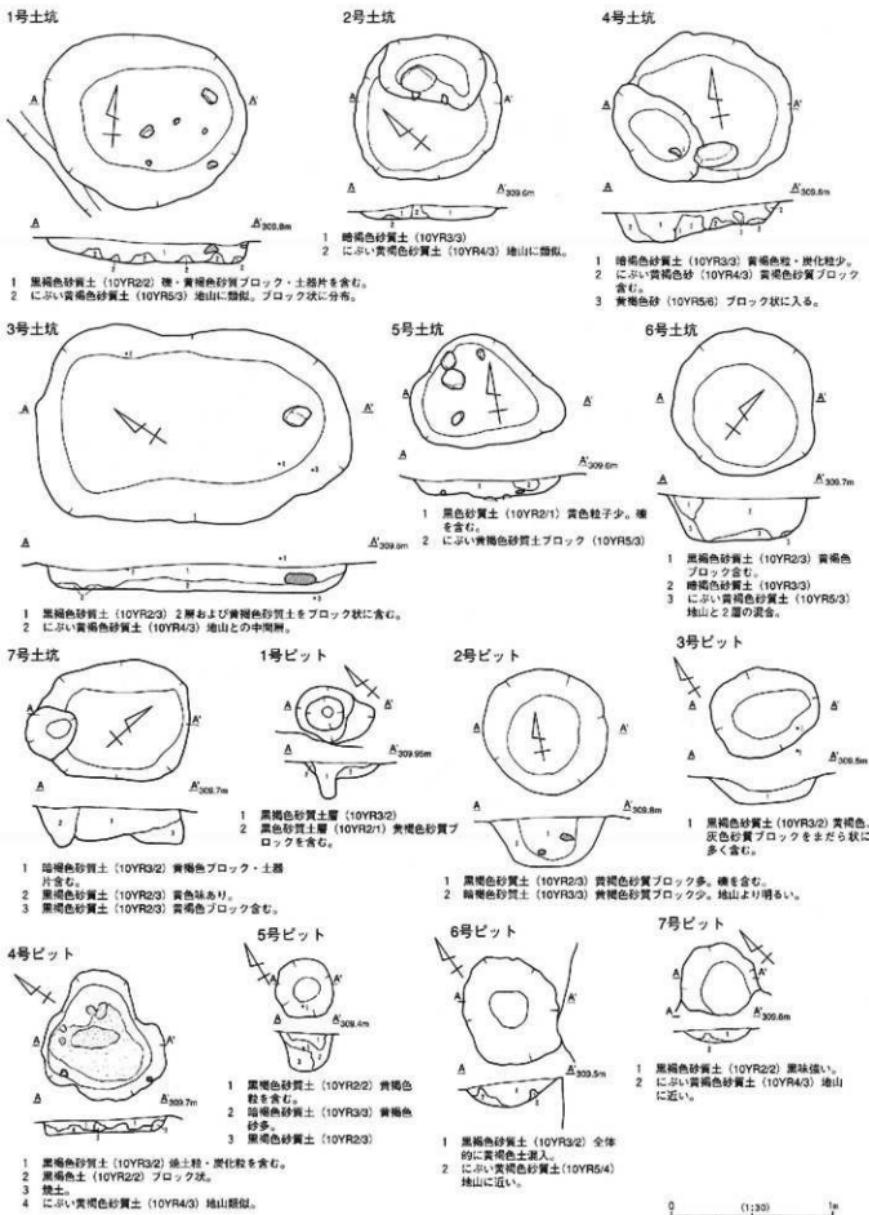
- 1 黄褐色土 (10YR4/2) ゴミ穴。黄褐色ブロック混入。
- 2 黑褐色土 (10YR3/2) 黄褐色土ブロックと黒色土ブロックの混合土。块状。ゴミ入り。
- 3 黄褐色土 (10YR4/2) ややサビ化した土を含む。块状。
- 4 黄褐色土 (10YR4/4) 黄褐色土 (10YR4/2) サビ物・炭化物あり。
- 5 にぶい黄褐色砂質土 (10YR5/2) 脱鉛な砂質土。炭化物あり。
- 6 黄褐色砂質土 (10YR4/2) 6層弱。やや暗い。
- 7 黄褐色砂質土 (10YR4/2) やや粗い砂層。下層に小礫多い。
- 8 黄褐色砂 (10YR4/2) やや粗い砂層。下層に小礫多い。
- 9 にぶい黄褐色砂 (10YR4/2) 粒2~5cm大の礫多。
- 10 黄褐色砂質土 (10YR4/2) 密度。しまり強。

第6図 1・3号溝

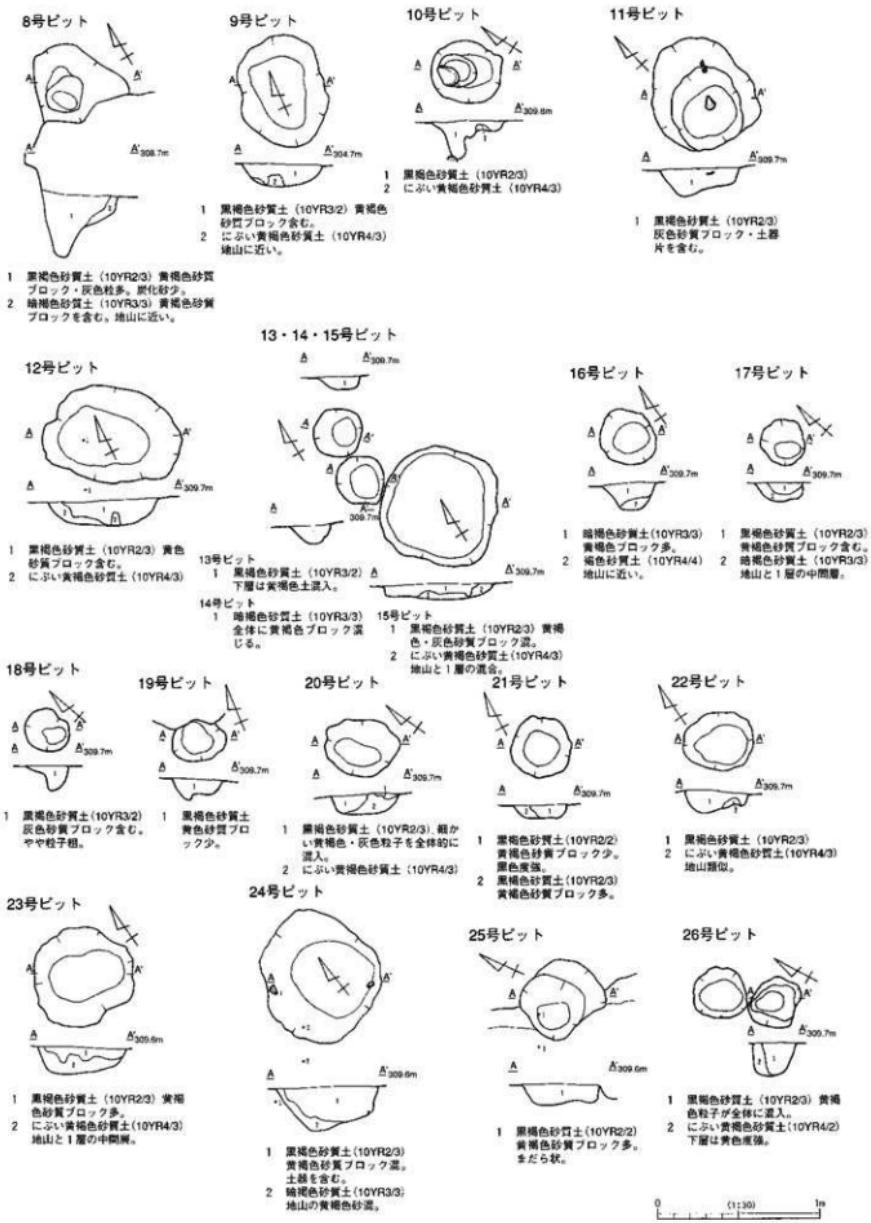
0 (1:30) 1m



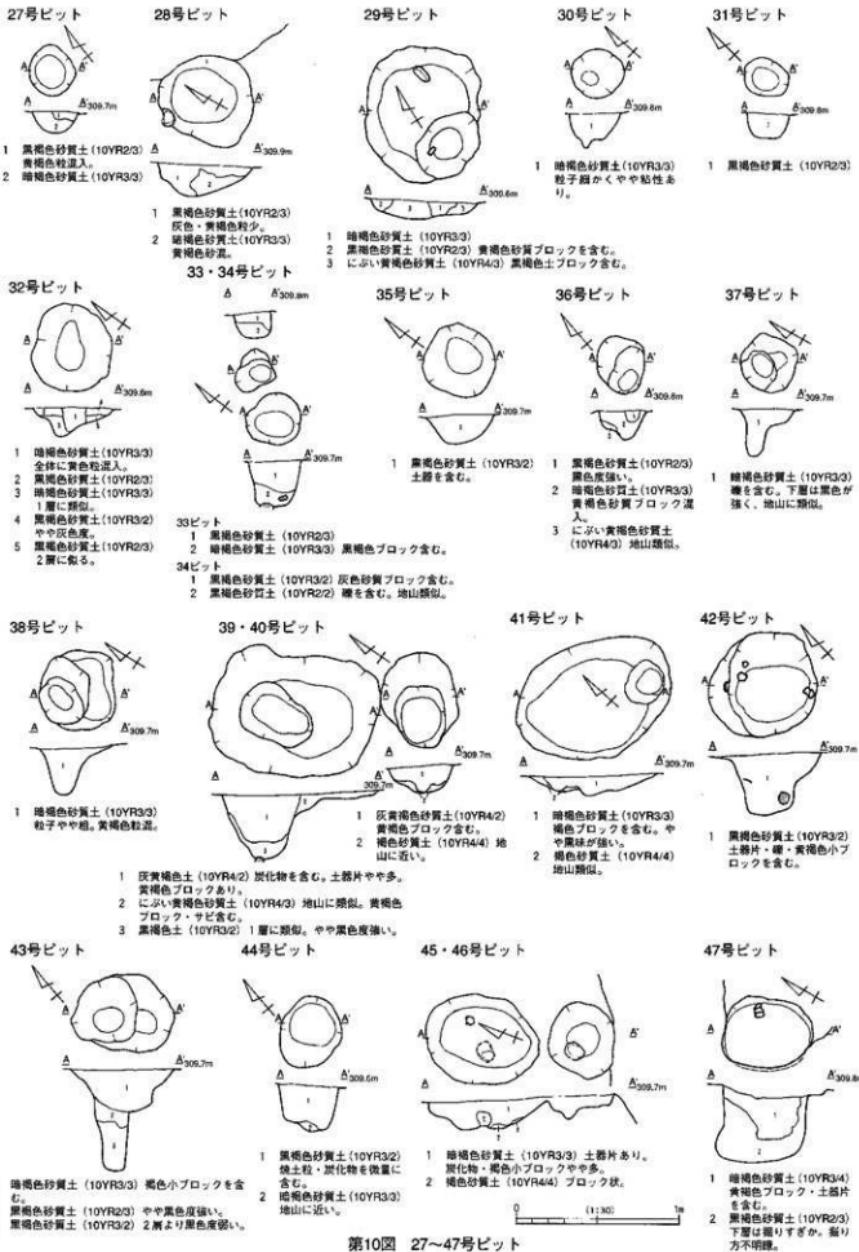
第7図 4～12号溝、土層断面図



第8図 1～7号土坑、1～7号ピット



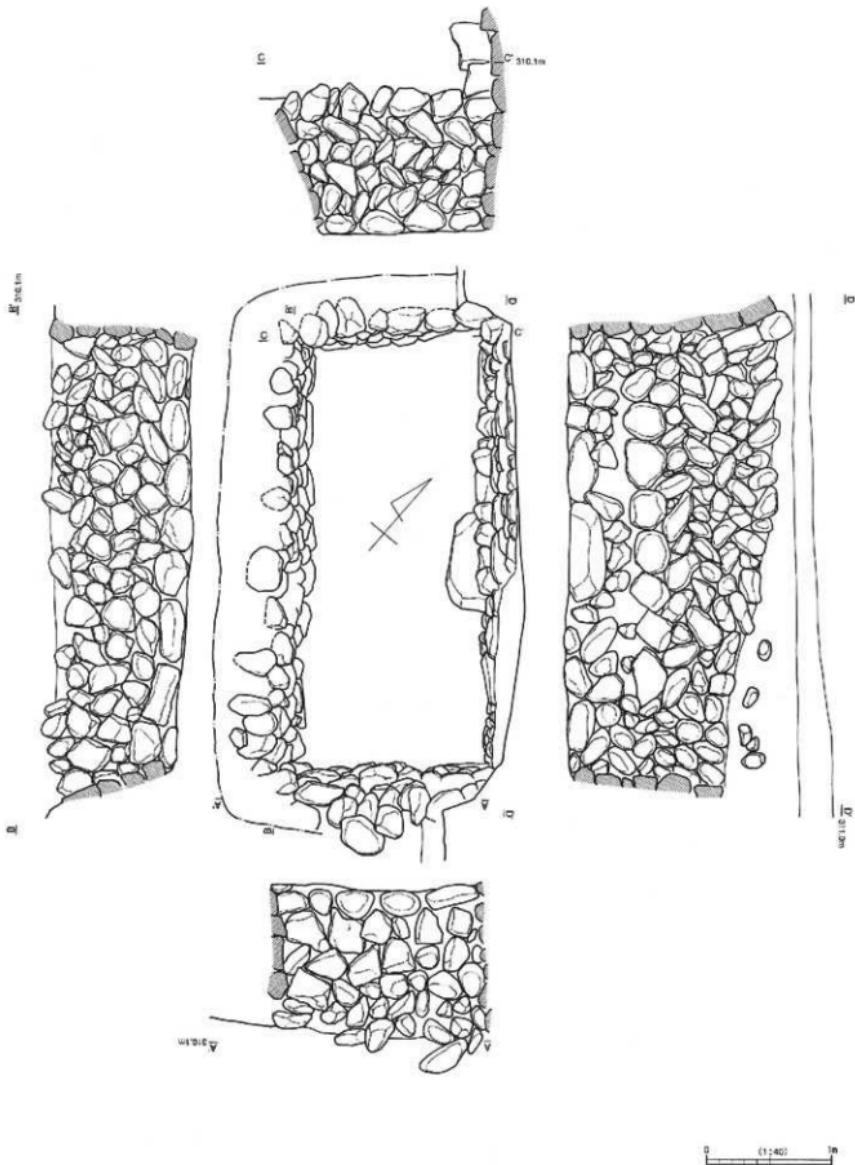
第9図 8～26号ビット



第10図 27~47号ビット

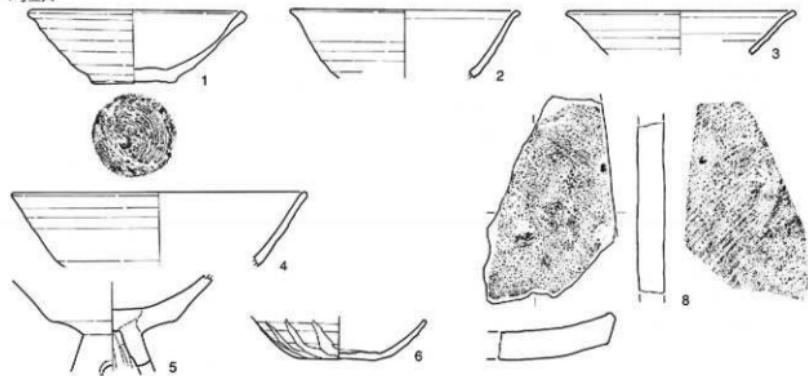


第11図 48~58号竪穴、1号井戸

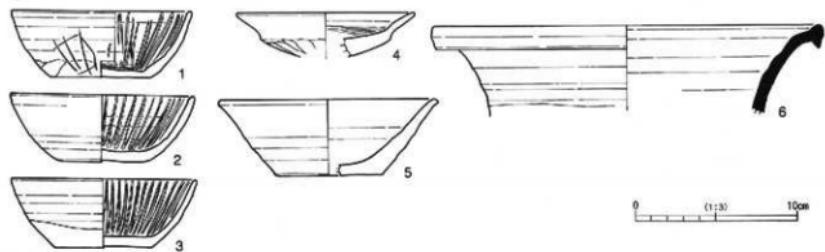


第12図 1号石組

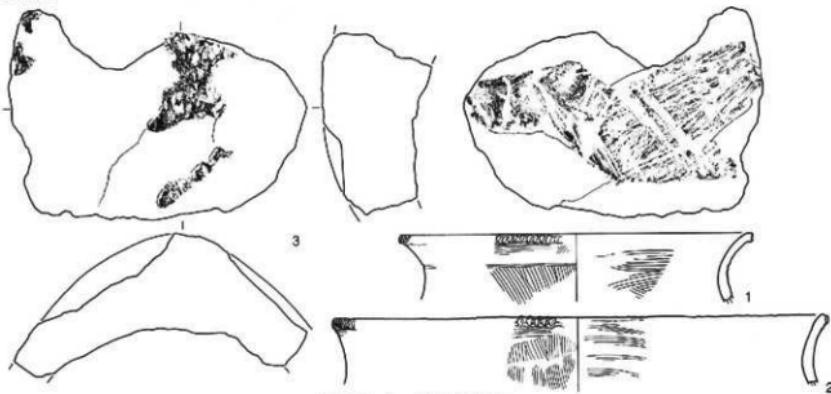
1号竪穴



2号竪穴

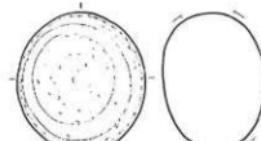
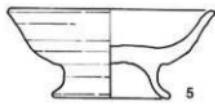
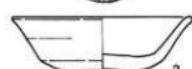
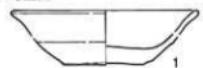


3号竪穴



第13図 1～3号竪穴遺物

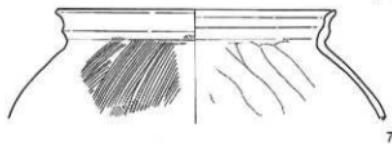
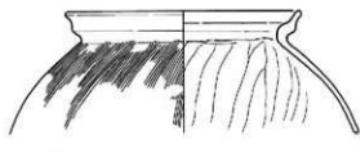
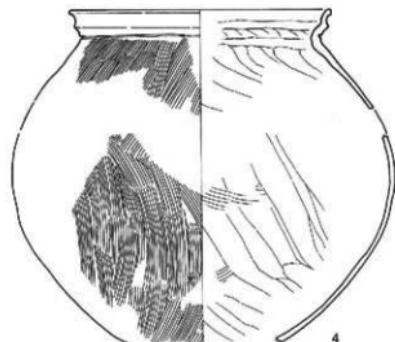
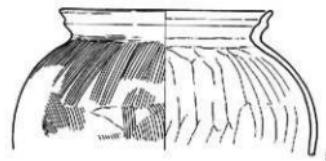
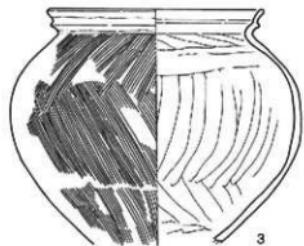
4号竪穴



5号竪穴



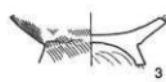
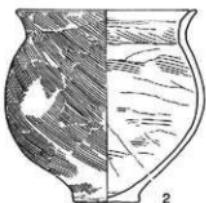
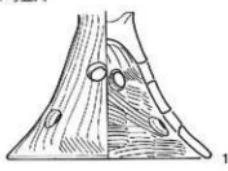
6号竪穴



0 (1:2) 10cm

第14図 4～6号竪穴遺物

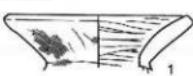
7号竪穴



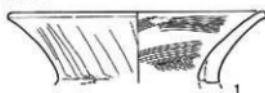
8号竪穴



3号土坑



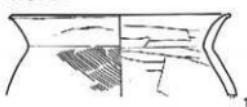
4号土坑



5号ピット



12号ピット



24号ピット



51号ピット

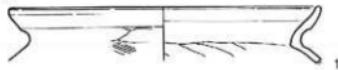


25号ピット

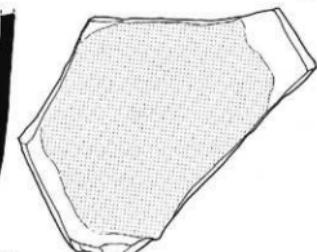
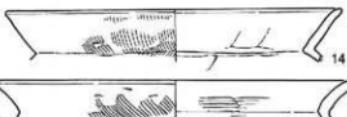
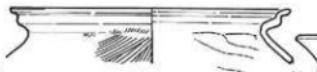
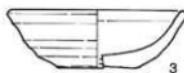
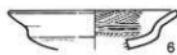
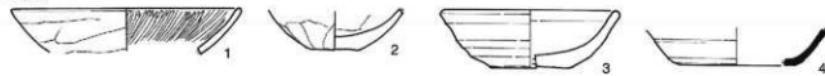


第15図 7・8号竪穴遺物、3・4号土坑遺物、3・5・12・24・25・51号ピット遺物

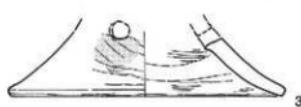
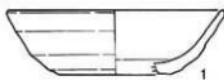
1号溝



6号溝



7号溝



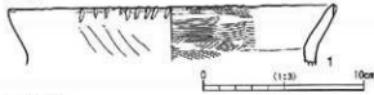
8号溝



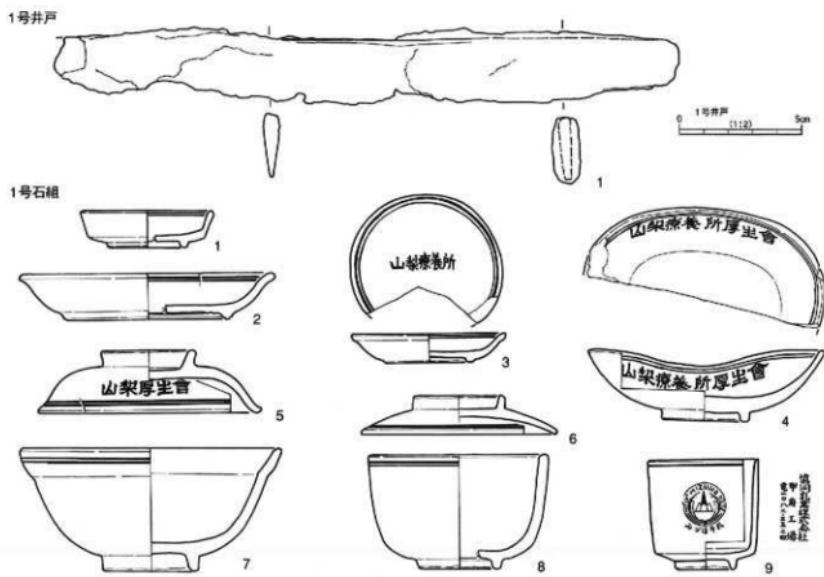
9号溝



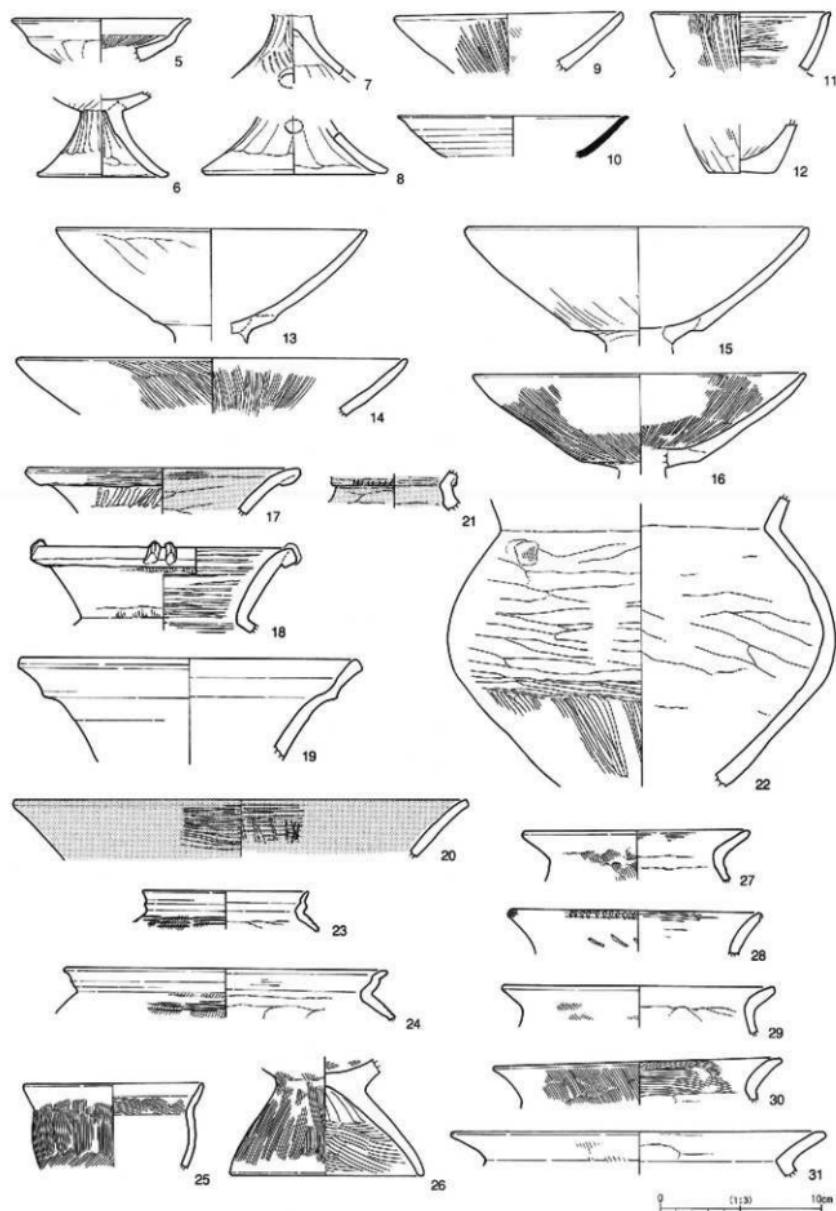
10号溝



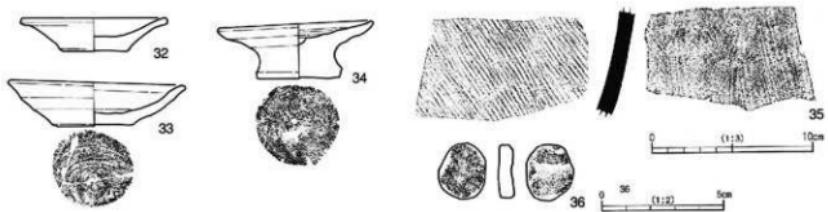
第16図 1・6～10号溝遺物



第17図 1号井戸遺物、1号石組遺物、遺構外遺物 (1)



第18図 遺構外遺物 (2)



第19図 遺構外遺物 (3)



1：調査区南側全景
(2000年7月9日
日南東3号船屋上より撮影)



2：同



1 : 調査区北側全景
(2000年7月31日) 南東
3号館屋上より撮影



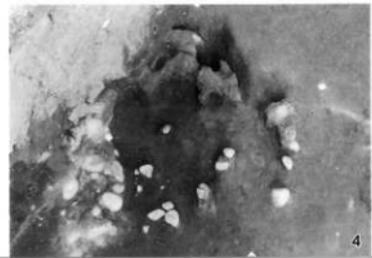
2 : 調査区北側全景
(南より)



1 : 調査区南側
上層（溝完
掘状況、北
より）

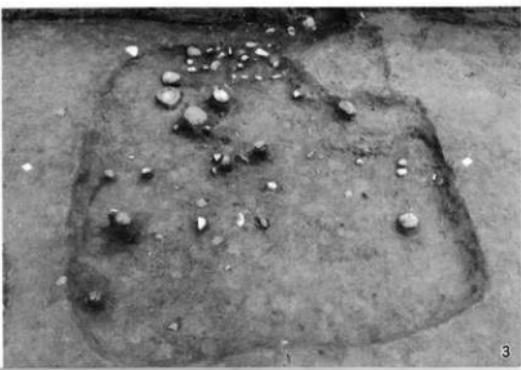


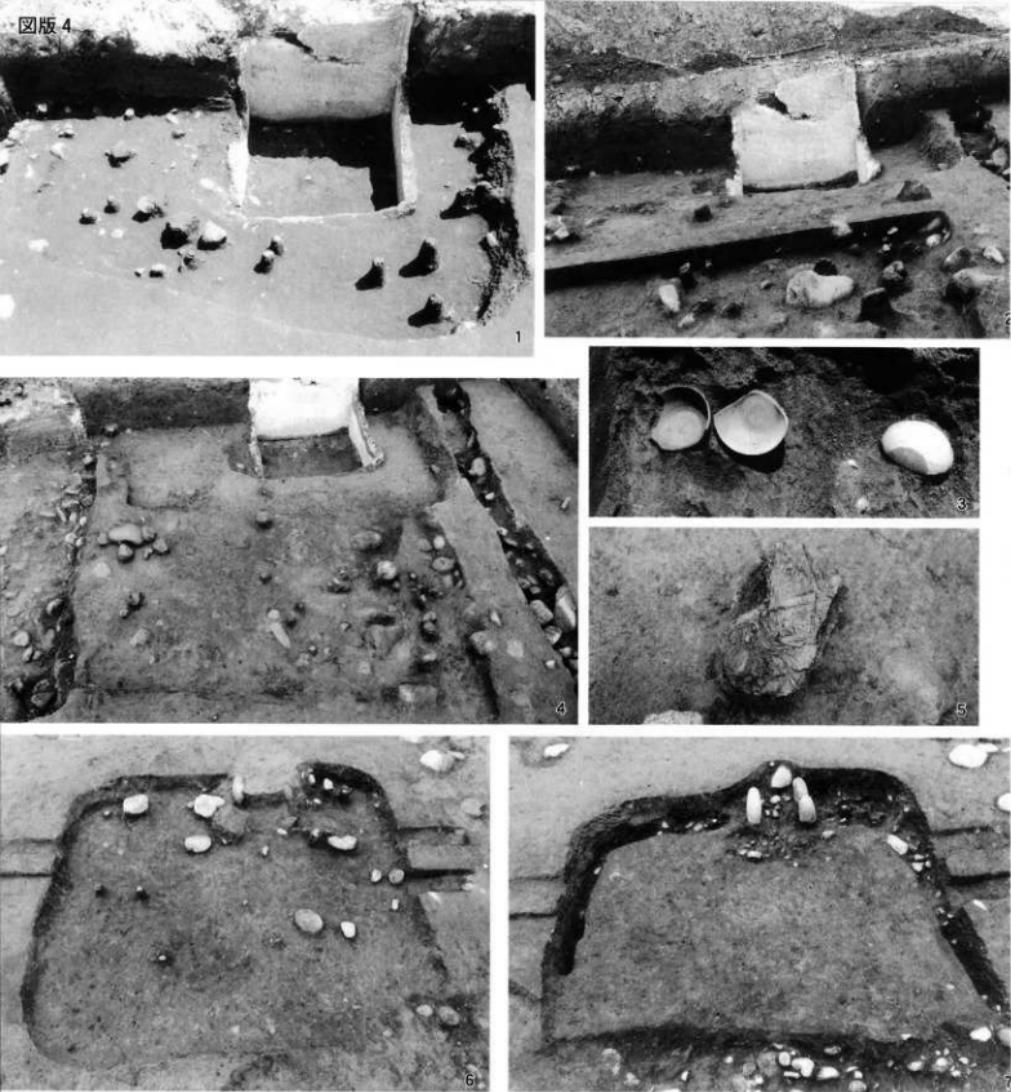
2 : 調査区南側
下層（ピッ
ト完掘状況、
北より）



3 : 1号竖穴遺物出土状況（西より）

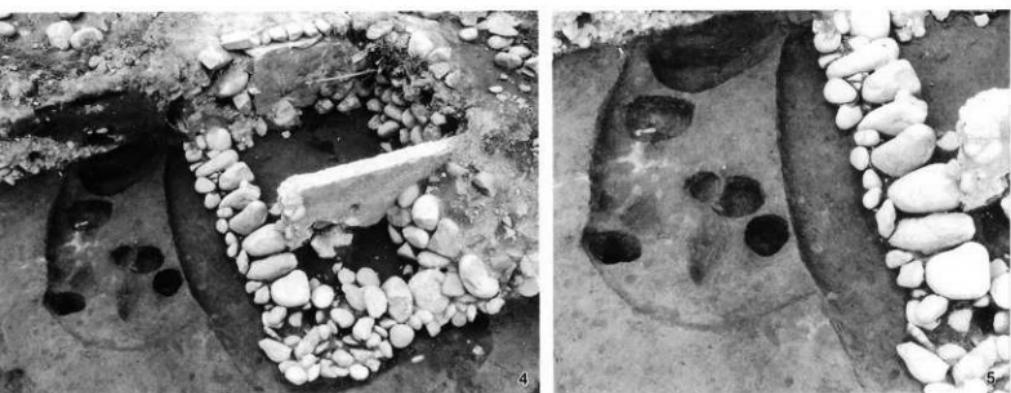
4 : 1号竖穴竈



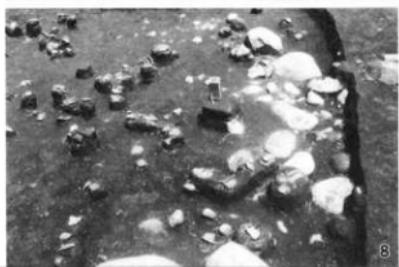
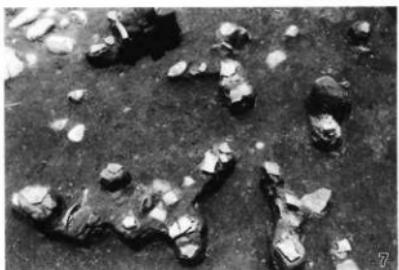


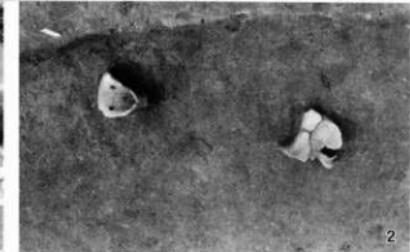
1 : 2号竪穴遺物出土状況（西より） 2 : 同（東壁断面状況）
 3 : 同土器器坏出土状況 4 : 3号竪穴遺物出土状況（西より）
 5 : 同土製品出土状況 6 : 4号竪穴遺物出土状況（南より）
 7 : 同完掘状況 8 : 同床下完掘状況
 9 : 同竈検出状況（西より）





- 1 : 4号竪穴完掘状況（北より）
 2 : 同（南より）
 3 : 同（西より）
 4 : 5号竪穴周辺石組（南より）
 5 : 5号竪穴（南より）
 6 : 6号竪穴遺物出土状況（西より）
 7・8 : 同遺物出土状況
 9 : 6・7号竪穴完掘状況（南より）





1 : 7号竪穴遺物出土状況

2 : 同

3 : 8号竪穴完掘状況（西より）

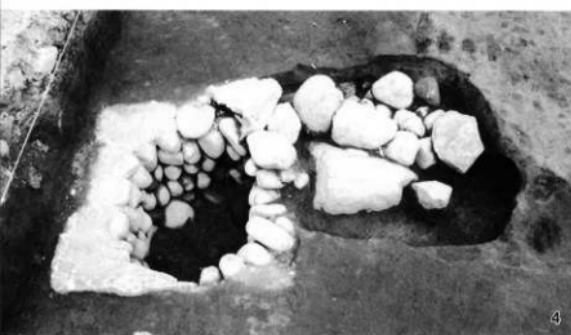
4 : 1号井戸周辺完掘状況（北より）

5 : 1号井戸

6 : 1号石組（西より）



3



4



5



6

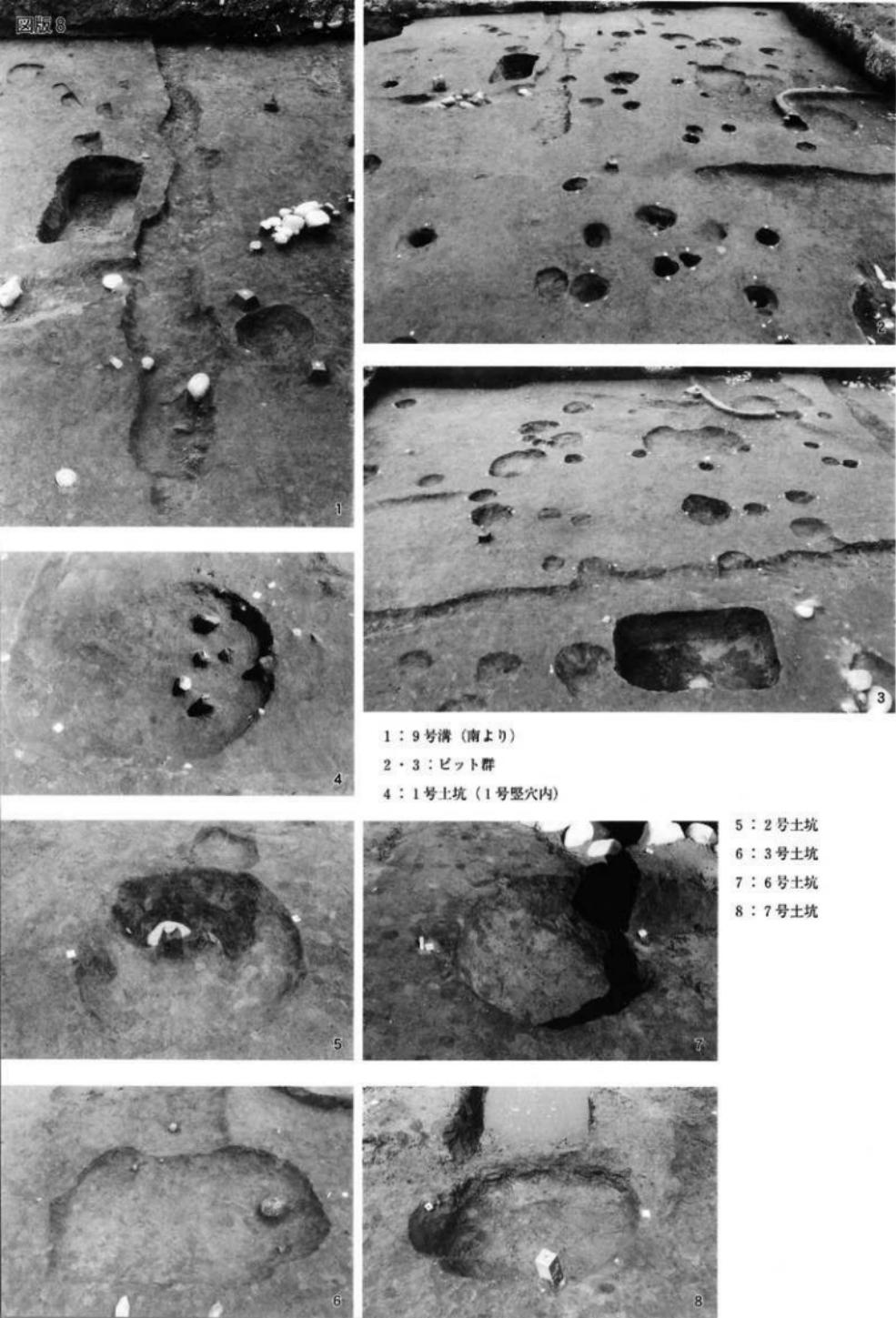


1 : 1号溝（西より） 2 : 4・5号溝（西より） 3 : 3号溝（南より）

4 : 同（北より） 5 : 6・10号溝（南より） 6 : 7号溝（西より）

7 : 8号溝（南より）

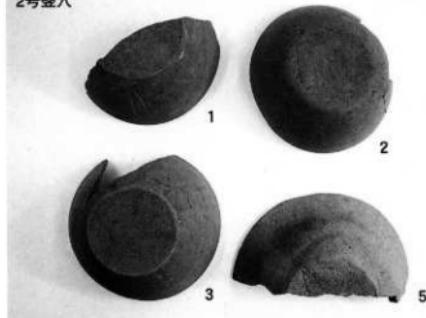




1号竪穴



2号竪穴

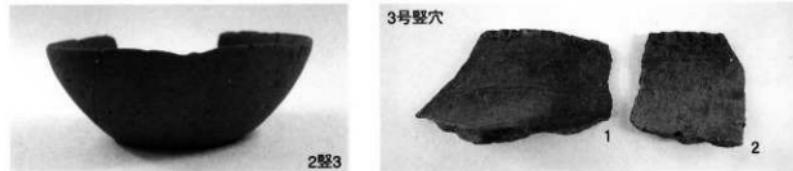


2竪1

2竪1

2竪2

3号竪穴



3竪3



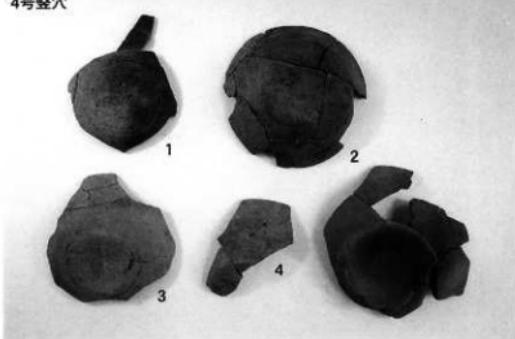
3竪3

1竪8



图版10

4号竖穴



6号3



6号4



6号7

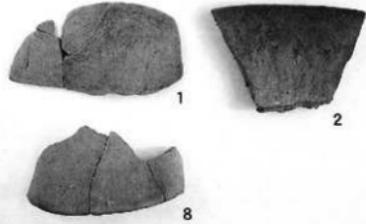


6号5

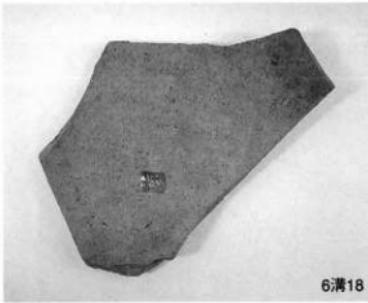
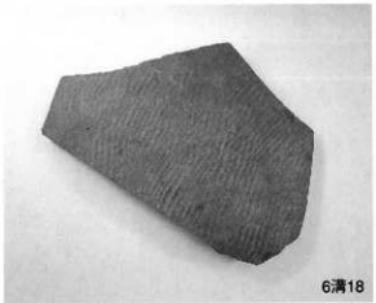
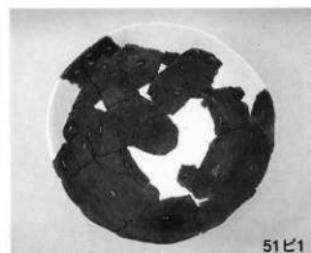
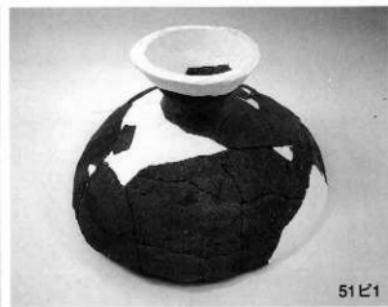
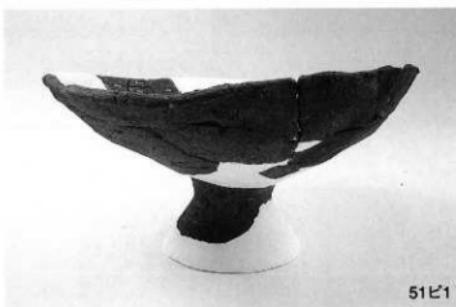
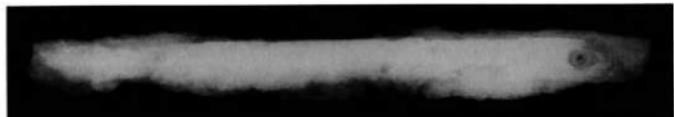
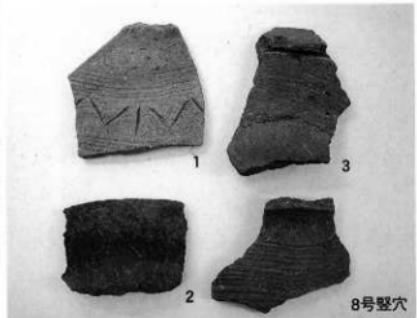


6号6

6号竖穴



7号1



遺構外



1



2



18



19



25



4



4



4



4



1号石組

報告書抄録

フリガナ	エンメイジイセキ	
書名	延命寺遺跡	
両題	山梨厚生病院授産施設建設に伴う発掘調査報告書	
シリーズ名	山梨市文化財調査報告書 第9集	
著者名	柳原功一	
発行者名	(財)山梨厚生病院・山梨市教育委員会・(財)山梨文化財研究所	
編集者名	(財)山梨文化財研究所	
住所・電話番号	〒406-0032 山梨県笛吹市石和町四日市場1566 (財)山梨文化財研究所 TEL 055-263-6441	
印刷所	帝京サービス	
発行日	2005年3月31日	
延命寺遺跡	所在地	山梨県山梨市落合870
	1/25,000 地図名・位置・標高	塩山 北緯35度41分08秒 東経138度39分50秒 標高 309m
遺跡概要	主な時代	古墳時代前期、平安時代、近・現代
	主な遺構	聚穴建物跡8・土坑・ピット・溝、井戸、石組
	主な遺物	土師器S字甕・パレス甕・土師器壊・甕など
	特殊遺構	井戸・石組
	特殊遺物	線刻土器・パレス甕
	調査期間	2003年6月3日～8月7日

なお緯度・経度は世界測地系データに基づく数値である。

延命寺遺跡

—山梨厚生病院授産施設建設に伴う発掘調査報告書—

平成17年（2005）3月31日 発行

編 集 (財)山梨文化財研究所

〒406-0032 山梨県笛吹市石和町四日市場1566 TEL 055-263-6441

発 行 (財)山梨厚生会・山梨厚生病院・山梨市教育委員会・(財)山梨文化財研究所

印 刷 (株)帝京サービス

